

令和4年度

# 研究集録

川越市教育委員会委嘱学校研究  
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会



## あ い さ つ

川越市教育委員会教育長

新保 正俊

令和4年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究校12校及び指定学校研究校4校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

本市では、第三次川越市教育振興基本計画において、基本理念「生きる力を育み未来を拓く川越市の教育」の実現に向けて、「志を高くもち、自ら学び、考え、行動する子どもの育成」を目標に掲げています。昨今の社会情勢の加速度的な変化の中で、持続可能な社会の担い手を育成することは教育の使命であり、一人一人の子どもが夢や志をもって人生を切り拓き、未来社会の創り手となるために必要な資質・能力を育む教育を充実させることが重要であります。

こうした中、各研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、「川越市小・中学生学力向上プラン」に基づく授業改善、指導方法の工夫、学習環境の整備、ICTの効果的な利活用、英語教育の充実、ふるさと学習の推進等、教育活動をより深化・充実させる実践を重ねてこられました。

各学校の研究成果は、自信をもって自分の意見を発表する子どもの姿、学習に粘り強く取り組む子どもの姿、ICTを効果的に利活用して学習に取り組む子どもの姿、協働的な学習を通して英語の楽しさを実感する子どもの姿など、子どものよりよい変容となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の4校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を様々な発表形式で発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、本集録にまとめられた研究内容や成果を、個々の学校の状況に応じて教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして積極的に活用されることを期待しております。そして、「川越市小・中学生学力向上プラン」で示す「川越授業スタンダード」をより一層深化させ、「どのように学ぶか」という視点に立ち、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進することで、子どもの学びの質を高め、学力向上につなげていただきたいと思います。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

# 目 次

## 【委嘱学校研究〈2年次〉】

川越第一小学校

「自分の考えをもち、自信をもって発信できる児童の育成」・・・・・・・・・・ 1  
～つなぐ～

今成小学校

「学び合い・高め合い・鍛え合う児童の育成」・・・・・・・・・・ 5  
～学びかがやく指導を通して～

霞ヶ関小学校

「主体的・対話的で深い学びの視点に立つ授業改善」・・・・・・・・・・ 9  
～情報端末の活用を通して～

初雁中学校

「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」・・・・・・・・・・ 13  
～デジタル教科書・ICTを活用した指導法の工夫～

## 【委嘱学校研究〈1年次〉】

新宿小学校

「個別最適な学びと協働的な学びを実現する算数科授業」・・・・・・・・・・ 17  
～ICTの効果的な活用を通して～

南古谷小学校

「自他を尊重し合い、よりよい生活づくりに主体的に参画する児童の育成」・・ 21  
～合意形成のよさを実感することのできる学級活動の充実～

霞ヶ関南小学校

「児童一人一人が学ぶ喜びを実感できる授業づくり」・・・・・・・・・・ 25  
～「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習指導の工夫を通して～

霞ヶ関東小学校

「友達と協力し、思考力・表現力を高め合う“太陽の子”を目指して」・・・・ 29  
～「情報活用能力の育成」を図るICTの活用実践～

広谷小学校

「集団の一員として、自ら考え、自ら活動する広谷っ子の育成」・・・・・・・・ 33  
～子供の思いを大切にされた特別活動の実践を通して～

野田中学校

「学力向上＝授業改善×学級づくり」・・・・・・・・・・ 37  
～課題解決に向けた話し合い活動の充実～

寺尾中学校  
『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善」・・・・・・・・・・ 4 1  
～生徒一人ひとりの学ぶ意欲を引き出し、基礎学力の充実を図る工夫～

霞ヶ関東中学校  
「自主的・実践的な集団活動を通して、生徒一人一人の『生きる力』の育成」・・・ 4 5  
～積極的な話し合い活動の充実～

### 【指定学校研究】

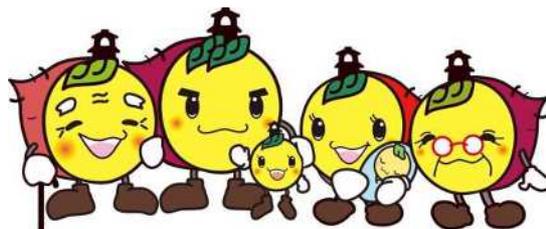
武蔵野小学校  
「武蔵野小学校のふるさと学習」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 9  
～ふるさと川越・武蔵野小学校への愛着・誇り・地域に貢献しようとする心を育む～

城南中学校  
「地元への愛着・誇り・地域に貢献しようとする心を育む」・・・・・・・・・・ 5 5  
～地元を知る・地元で生きる・地元で密着～

大東西小学校  
「自分の思いや考えをもち、進んで表現し、互いに考えを深めていくことができる児童の育成」・・・ 6 1  
～ICT 機器を効果的に活用した学びを通して～

大東西中学校  
「ICT を正しく主体的に使いこなす生徒の育成」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 5

令和 4 年度研究集録



川越市マスコットキャラクター ときも

# 「自分の考えをもち、自信をもって発信できる児童の育成」 ～つなぐ～

学校名 川越市立川越第一小学校

## 研究のポイント

- 思考判断表現を軸にし、教科を横断につないだカリキュラム・マネジメント
- 「比較する」「分類する」「関係づける」ための思考ツールの活用
- 学びを育てる言語環境（目的意識・相手意識・学習形態・掲示物等）
- 一小スタンダードと川越市学力向上プランを軸にした指導
- ICTの効果的な活用（電子黒板・Chromebook等）

## 1 研究の概要

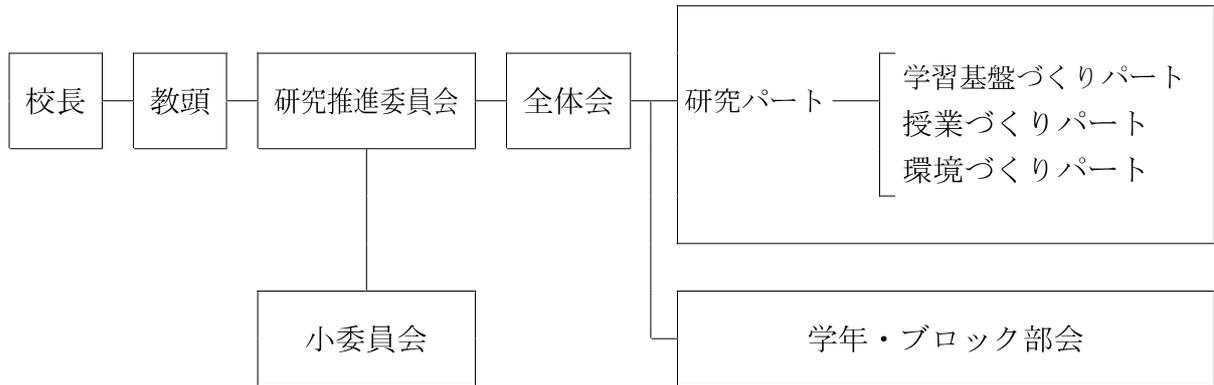
### (1) 研究のねらい

本校の教育目標は「いのちをだいに」「人をだいに」「心をだいに」「ものをだいに」であり、これらを「四つのだいに」と呼び、日々、この目標を意識して教育活動を行っている。令和3年度、4年度の二年間、川越市教育委員会及び川越市教育研究会の研究委嘱を受け、本校の課題でもあり、これからの時代に必要な力、「発信力」を育てる研究に取り組んできた。全職員で共通の認識をもって指導に当たるため、「発信」の定義を「多くの人に目的を持って主体的に伝えること」とした。また「発信力」は、日々の授業の中で自らの経験や既習事項を生かして新たな考えを作り出したり、他者の様々な考えを学び合ったり、他者に自分の新たな考えを作り出すための材料を支援助言してもらったりすることで、育むことができると考えた。そこで、研究主題を「自分の考えをもち、自信をもって発信できる児童の育成」とし、自分の考えをもって相手に伝えていくことで相手に認められ、自信をもって発信することができる児童の育成を図ることを目指した研究に取り組むことにした。

### (2) 研究主題設定理由

本校は、『四つのだいに』アンケートを毎学期行っている。その項目の中の「進んで発表していますか。」について課題を持っている児童が多くみられた。また、教師も日頃の授業の様子から、話す・発表する・伝える・表現する等に課題があると考えた。そこから考えられる原因として、自分の考えがもてないからではないのか、さらに自信をもって発信する力が弱いからではないかと考えた。そこで、自分の考えをもつためにはどのような授業をすればよいのか、自信をもって発信するには、どのような力がつけばよいのか、研究をしていくことにした。また、単に話型を示したり、学習形態を整えたり、話し方スキルを向上したりするものではないなど話合いを重ね、研修を重ねた。その結果、自信をもって発信できるよう上記の研究主題・サブテーマを設定した。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

上記の主題を受け、目指す児童像を「①学習したことを生かして、自分の考えをもつことができる児童」「②自分の表現方法で仲間と考えを交流し学び合う活動を通して自信をもって発信できる児童」と設定した。そして、達成のために「①自分の考えをもつ」「②発信するための自分の表現方法を選ぶ」「③お互いが発信し合うための学び合い」の三つを柱として、それぞれに低・中・高学年ではどのような力をつければよいのかを考え、系統性を持たせた。ここから具体的な手立てを考え、取り組んだ。

## 3 実践事例

### (1) 授業づくりに向けた手立て

① 自信をもって発信するための10の重点  
 発信する授業を具体化し、「自信をもって発信する」を工夫改善するため、川越第一小の『自信をもって発信するための10の重点』を設定し、効果的な働きかけをした。

② 発信するための系統性  
 発信するために目安として、本校の実態、学習指導要領国語編から、学年の発達の段階に応じて基準を定めた。特に「話し合い」「伝え合い」をポイントとし、他学年とのつながりを重視し、6年間をつないだ。

#### 自信をもって発信するための10の重点

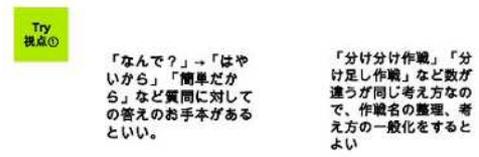
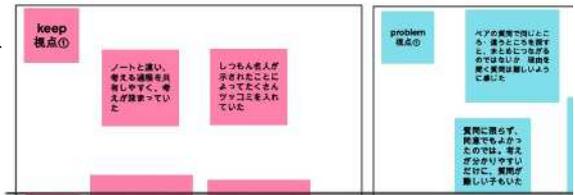
- 重点1 自分から進んで取り組もうとしている。
- 重点2 既習事項や自分の経験をいかそうとしている。
- 重点3 わかりやすく説明しようとしている。
- 重点4 根拠をもって説明しようとしている。
- 重点5 相手に伝えようとしている。
- 重点6 よりよい方法を考え出そうとしている。
- 重点7 批判的な考えをもって話し合い、発信している。
- 重点8 友達の話を聞いて自分の考えに修正を加えて、よりよいものにしてしている。
- 重点9 友達の話を聞いて自分の考えに修正を加えて、新たな考えを伝えている。
- 重点10 目的を持って相手に伝えようとしている。

#### 発信するための系統性

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
対話	いろいろな友達と自己紹介をしながら話しをする。	相手が今、夢中になっていることに気をつけ、相手の発言を受けながら話す。	1枚の絵を見て、相手が考えたことに同意したり質問をしたりして、反応を示しながら話をつなぐ。	想像したことを互いに話して、共通点や相違点を着目しながら話す。	心に残った言葉について互いに質問しながら、話をつなぐ。	三つの対話の例をもとに、普段の自分たちの対話を振り返り、考えたことを伝え合う。
聞く	見つけたものは何か、みんなの前でクイズを出す。先生から聞いたことをグループに伝える。	聞きたいことをおまきず聞く。	大事なことをおまきず聞く。	聞きたいことの中心を考えて聞く。	意図を明確にして聞く。	話し手の考えと自分の考えを比べる。
話し合う	話を楽しくつなぐ。	言葉をつないで話し合う。	司会の進行に沿って話し合う。	役割を考えながら話し合う。	意図を明確にしたがる。計画的に話し合う。	立場を明確にしたがる。話し合う。
話す (個性)	楽しみを思い出してみんなの前で話す。聞き手は質問や感想を述べる。	紹介したことが伝わるように話す。	話の中心が伝わるように話す。	聞き手に伝わるように1次して話す。	伝えたいことが印象に残るように話す。	思いが伝わるように話す。
話す (模擬活用)	順序よく話す。出来事の流れに話す。	順序に気を付けて説明する。伝えたいことが伝わるように話す。	話の組み立てや話し方を工夫する。	わかりやすく伝える。	考えが明確に伝わるように話す。資料と関係づけて話す。	プレゼンテーションをする。

③ KPT法による研究協議会

研究授業の振り返りとして行った。個人で **Keep** (うまくいったこと・今後も続けたこと) と、 **Problem** (うまくいかなかったこと・疑問) の二つを書き出し、その後全員で共有しながら、 **Try** (改善策・今後とすべきこと) を考えた。ジャムボードを使用して授業の視点について話し合い、さらなる授業の改善を探っていく。校内の研究協議会だけでなく、研究発表会の分科会でも、この方法で協議を行った。



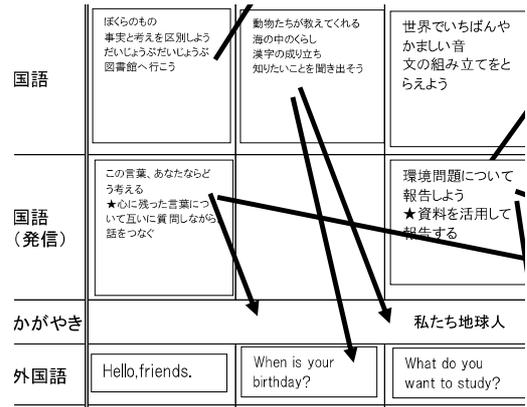
(2) 二年間の授業実践

学年ごとに令和3年度は10月から1月の間に「生活・算数・社会・道徳・総合・理科」で、令和4年度は6月から7月の間に「生活・社会・道徳・総合・国語・生活単元」で授業実践を行い、手立てが有効であるかについて検証を行った。また、それぞれの実践後にはKPT法で協議を重ね、11月11日の発表では明らかになった課題の改善を図った授業を行った。

(3) パートごとの実践

① 学習基盤づくりパート

ア カリキュラム・マネジメントの見直し  
令和3年度より、発信に関わる国語の学習を中心に、カリキュラム・マネジメントの見直しを行い、単元一覧表に記入することで各教科の各単元で、他教科との関連性を意識しながら授業を進めた。



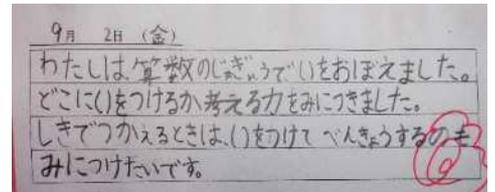
イ アンケート

3つの学び「進んで発表」、「話し合い」、「伝え合い」の観点をもとに作成したアンケートにより、児童の実態や変容を様々な角度により分析、考察することで、学校研究の成果や課題を明らかにし、児童の課題をとらえ、課題解決に向けた具体的な手立てに生かした。

ウ 「学びの足あと」

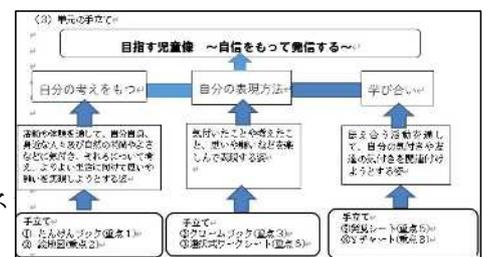
全学年で毎週金曜日に「学びの足あと」を行った。「学びの足あと」は、発達段階に応じて連絡帳やChromebookを使い、一週間の学習活動での自分の考えや行動を振り返り、文章にした。

2年生のノートから



② 授業づくりパート

ア 自信をもって発信できる授業デザイン  
本学習のめあてと単元における発信のめあてを繋ぎ、ゴールイメージを明確にするとともに、段階を矢印で表した。また、全体のカリキュラム・マネ



の単元に関わるカリキュラムを見つけ、既習の発信する力を生かせるようカリキュラムをさらに細かくデザインした。

#### イ 単元の手立てと重点

目指す児童像に向けた単元全体の手立てと本時の手立て、また、『自信をもって発信するための10の重点』との関わりを指導案上にも表記し、どの教科、どの単元でも常に目指す児童像を意識して取り組んだ。

### ③ 環境づくりパート

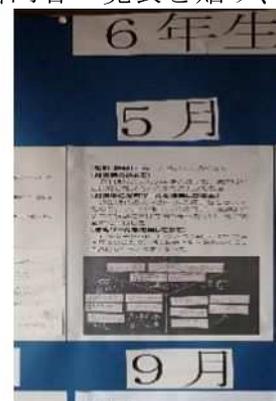
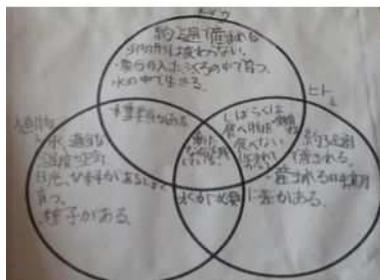
#### ア 思考ツールひな型の作成

chromebookでも思考ツールを活用できるように、各ツールを画像にしたものを職員で共有した。必要に応じて、グーグルスライドやグーグルジャムボード画像を配置して、すぐに使用できるようにした。

また、各学年で月ごとに思考ツールを活用した学習の振り返りレポートを作成、模造紙に貼って掲示し、学びの共有を図った。

#### イ 家庭学習手引きの作成・掲示

四・五・六年生は、自主学習ノートの表紙裏に家庭学習内容一覧表を貼り、学習をする上で参考にした。



## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ① 国語科の「伝え合う」「話し合う」を中心とした、カリキュラム・マネジメントを行い、他教科に分かるつながりを意識しながら研究授業を行うことで目指す児童像に迫ることができた。
- ② 「比べる」「関係する」「分類する」「多面的に考える」力を育成する上で、思考ツールの活用が有効であった。問題解決の場面で活かされた。
- ③ 各学年の発達段階に応じて伝え方などの方法を考え、自分の考えを自信をもって発信することができるようになった。
- ④ 児童が一週間の学びを振り返ることで、どんな力がついたか意識することができ、自己肯定感の向上が見られた。

### (2) 課題

- ① 発信するための手立てを確認する「10の重点」を見直し、さらに全体のつながりを意識して他教科にわたる授業を展開できるようにする。
- ② 本校の立地を活かし、外部の人的・物的資材と連携し、より社会に開かれた教育課程を求めていく。
- ③ 系統性を踏まえて話し合い方法を多様にし、児童がより発信しやすいようにする。
- ④ 学びの積み重ねによる児童の具体的な伸びを見取り、評価しながら確認し、さらに個別最適化された学習支援へつなげていく。

# 「学び合い・高め合い・鍛え合う児童の育成」

～学びかがやく指導を通して～

川越市立今成小学校

## 研究のポイント

- 持続可能な指導方法の確立を目指す
- 国語科算数科における言語活動を位置付けた授業の改善及び実践をする
- 学力向上の基盤となる学級経営の充実に向けた環境整備（学校図書館・生徒指導・情報教育・特別活動）を行う

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

学びのスタンダードを確立することにより、児童も教師もとまどうことなく学習に取り組めるようになると考えられる。学習の仕方や授業の進め方がある程度示すことで、教職員に異動等があっても、どの教員でも同じような学習が展開できるというよさがある。国語科と算数科における学びのスタンダードを確立させ、今後どの教科でも取り組めるようにしていきたい。また、学びの基盤となる学級経営の充実にも取り組み、全教職員が一つのチームとなって児童の学力向上へと取り組んでいきたい。

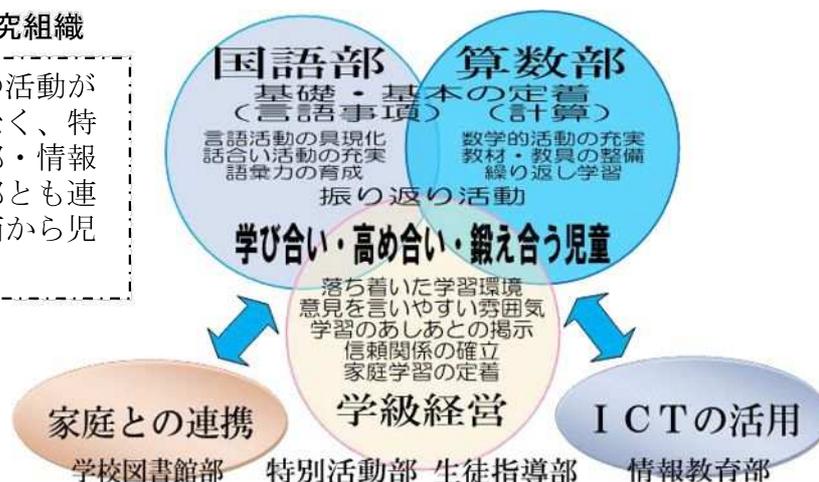
### (2) 研究主題設定理由

本校では平成31年度まで、「学習したことを活用し、主体的に学習に取り組む児童の育成」を研究主題とし、国語科を中心とした児童の主体性を高める授業の創造に取り組んできた。成果として、「国語が好き」と答える児童の割合が増加し、埼玉県学力学習状況調査や入間地区国語学力調査における国語科での学力の伸びも見られた。また、教師からも「国語科における指導方法や授業の流れが見えてきた」という意見があった。その一方で、他教科（特に算数科）では学力が伸び悩んでいるという課題が見えてきた。

そこで、令和2年度より、「学び合い・高め合い・鍛え合う児童の育成」を研究主題として設定し、国語科と算数科を中心とした「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善をおこなうこととした。また、「学びかがやく指導を通して」と副題にあるように、「授業の見通し」「振り返り活動の充実」「思考の可視化」を手がかりとし、教師も児童も学びかがやく「学びのスタンダード」の確立と、「学級経営の充実」を基盤とした学びの土台作りにも取り組むこととした。すべての教職員が一つのチームとなり、持続可能な取組を模索し、足並みをそろえていくことこそが、本校における課題（学力向上・学習意欲の向上）解決への第一歩であると考え、本研究主題を設定した。

### (3) 研究の全体構想及び研究組織

国語部と算数部での活動が中心というわけではなく、特別活動部・生徒指導部・情報教育部・学校図書館部とも連携を図りつつ、多方面から児童の力を高める。



## 2 研究の内容

### (1) 本校における指導の重点

#### ① 基礎・基本を身に付けさせるための取組

- ・児童の実態を把握し、学年・学級の実態や個に応じた指導を行う。
- ・言語活動を充実させ、単元の計画や一時間あたりの学習の流れを明確にする。
- ・振り返り活動を充実させ、児童自身が自分の学びを深めることができるようにする。

#### ② 自分を高めさせる取組

- ・学習課題を明確に示し、何を学ぶのかを児童自身がわかるようにする。
- ・個で考え、自分の意見を持つための時間をしっかり確保する。
- ・学び合いの場を設定し児童同士や児童と教師で学び合い認め合える環境を創造する。
- ・話し合い活動を繰り返し行うことで、学び合い伝え合うためのスキルを鍛え合えるようにする。

### (2) 仮説と手立て

〈仮説1〉学習内容が定着すれば、学習に前向きに取り組むようになるであろう。

〈手立て〉前向きに学習させるために、学習内容を定着させる

#### 【授業の中でできること】

##### 国語科

- ・授業冒頭5分で、前時までの振り返りの徹底と本時の学習課題提示の徹底

##### 算数科

- ・授業冒頭1分半で、計算スキルの実施
- ・数学的活動への積極的な取組

##### 共通

- ・最後の5分間での振り返り活動の徹底
- ・学習の流れと見通しの明確化
- ・今成小学び09の徹底

#### 【授業外でできること】

- ・教室掲示に「学習のあしあと」コーナーを設置
- ・家庭学習の進め方の統一

〈仮説2〉わかる・できる喜びを味わわせれば、自分の考えを広げたり深めたりする児童が育つであろう。

〈手立て〉自分の考えを広めたり、深めたりできるように、学び合う場を設定する

【授業の中でできること】

- ・自己解決の時間の確保
- ・具体的な言語活動の設定と実践
- ・学級の実態に応じた話し合い活動の充実
- ・認め合える場の設定
- ・学習成果発表の場の設定



個⇒グループ⇒個⇒全体

【授業外でできること】

- ・学級活動の充実
- ・認め合い励ましあえる学級の創造
- ・家庭との連携・協力

3 実践内容

【国語部】

- ① 既習事項や学習の見通しを掲示
- ② 興味関心を持ちやすい課題の設定
- ③ 話し合い活動と話し合いの方法の充実
- ④ 自分の考えを表現することができる指導事項に則した言語活動を選定
- ⑤ お互いの学びを認め合う場の設定

ICTを用いての交流

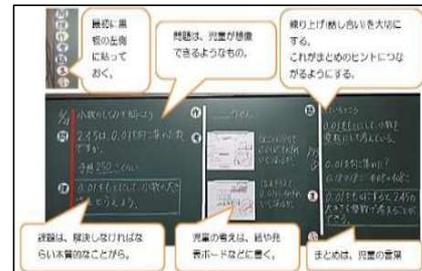


言語活動への取組



【算数部】

- ① 授業冒頭1分半でのスキルアップの実施
- ② 1時間当たりの学習の流れを統一化
- ③ ノートの書き方の統一（問・課・考・作・話・ま・ふ）
- ④ 既習事項や学習の見通しを教室に掲示
- ⑤ 自力解決での図・式・言葉等の活用
- ⑥ 繰り返しシートへの活用・話し合いの場面の充実



板書例

【特別活動部】

- ① ハンドブックをもとにした授業実践
- ② 校内で統一した学級会グッズ
- ③ 他クラスの実践を自分のクラスに生かす



学級会の木

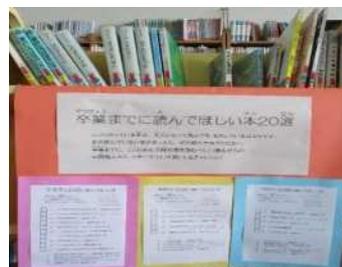


練習シート

【学校図書館部】

- ① 毎月1回、家庭での「うちどく」の実施
- ② 今成小卒業までに読んで欲しい本20選（+15選）の作成
- ③ 図書館だよりの発行

読んでほしい本20選



【情報教育部】

- ・ICTを活用した話し合い
- ・活動や深め合いの実践

- 今成小  
振り返りのポイント。
- ① 今までとくらべてできるよ  
うになったこと。
  - ② まとめを見ながら
  - ③ 「なぜ」「なるほど」と思っ  
たこと。
  - ④ 理由をつけて（理由もしっ  
かり）。

【生徒指導部】

- ① 今成小学び09を作成し、児童・保護者・教職員への周知・徹底
- ② 今成小振り返りのポイントを作成・掲示

今成小学び09

富士見中学校区5校連絡協議会で決めた小中連携の約束事を基に、砂中学校での取組を参考にして今成小流にアレンジしたもの。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 今成小学び09が実践されたことで、落ち着いた学習環境が整った。
- ② 振り返りの視点が浸透したことで、児童自身が自分の学びを深めることができた。
- ③ 川越市授業スタンダードが実践されたことで、学力の向上へとつながった。
- ④ 埼玉県学力学習状況調査・入間地区学力テストから学力の伸びがうかがえる。

(埼玉県学力学習状況調査より)

	6年生		5年生	
	埼玉県	本校	埼玉県	本校
学力を伸ばした児童の割合	76.9	86.2	55.0	64.3
進んでそうじに取り組む児童	86.5	93.1	87.6	93.0
学習したことをさらにくわしく 学びたいと思ったこと	65.1	77.6	68.7	71.9
話し合いや交流をしたことで自分の考え をしっかりとるようになったこと	76.2	86.2	73.5	75.5

(2) 課題

- ① ICTをどの場面でどのような形で活用することが最適なのか実践を積む。
- ② 国語科算数科以外でも「学びスタンダード」の取組をしていく。
- ③ 生徒指導部を中心に「無言で清掃する」から「無言になる清掃」へと変えていく。
- ④ 学級会グッズの充実や話し合いのスキルを磨く。

## 研究主題

# 「主体的・対話的で深い学びの視点に立つ授業改善」

～情報端末の活用を通して～

川越市立霞ヶ関小学校

### 研究のポイント

- 「学習者用コンピュータの効果的な活用」  
学年の実態に応じ、「課題や画像の提示」「Google Formsによる資料提示」「Google Meetを使った話し合い」「共同編集」等、よりよい活用方法を試行錯誤してきた。
- 教職員の業務改善・負担軽減 ～学年学級経営を重視するために～
  - ・「学校研究の進め方」をできるだけシンプルなものとした。（2年次）
  - ・学年やブロック単位での活動を中心とし、研究推進委員会で進捗の確認・調整を行った。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

- ① 学力向上
- ② 学習者用コンピュータの効果的な活用方法の模索
- ③ 教職員の業務改善・負担軽減を踏まえた学校研究の進め方の考案と実施

### (2) 研究主題設定理由

主体的・対話的で深い学びの視点に立った問題解決的学習の本校の学習過程（Kasumi Style）が、従前の学校研究の中で確立され、継承発展させつつ現年度を迎えている。この学習過程は、「川越市小・中学生学力向上プラン」にも通じる。

しかし、人事異動による教員の入れ替わりや、「コロナ禍」による「対話的な学び」の制限など、さらなる工夫・改善が急務となっている。さらに、GIGAスクール構想により、一人一台端末の時代を迎え、活用方法の模索が始まっているところである。

そこで、過去の成果を発展させるとともに、新しい技術の力を十分に活用するための研究を進めていきたいと考え、本主題を設定した。

### (3) 研究組織

令和3年度	令和4年度
1 研究推進委員会（学年1名）	1 研究推進委員会（学年1名）
2 専門部（学年内で分担） ・授業研究部 ・検証部 ・タブレット部 ・環境整備部	2 学年・ブロック（低・中・高） ・教務部も各ブロックに分かれる。 ・教務部は必要に応じ、教材教具の作成等を行う。
3 学年・ブロック	

令和4年度は情報端末の活用を一層充実させ、研究主題に迫るため、学年、低中高・特支のブロックを中心とした活動とした。令和3年度に設けた4部会の内容は、必要に応じて、研究推進委員会や情報部で担った。

## 2 研究の内容

### (1) 令和3年度

先の専門部4部会で、体制を整えつつ、「情報端末の活用」を進めることを重点とし、学校全体として教科を定めず、各学年で教科等を決定し、研究を進めた。

また、「川越市小・中学生学力向上プラン」の定着・深化を目指し、従前の学校研究で作成・改善を重ねてきた授業展開例「Kasumi Style」と「目指す児童像」（最終ページ参照）を整理した。

### (2) 令和4年度

学年・ブロック単位での活動を中心とし、研究推進委員会で進捗の確認・調整を行った。また、情報部に情報端末の整備や技能面での研修やサポートをお願いした。

全体研修や各部会に充てていた時間を削減し、より一層、授業改善を中心とした取組になることをねらった。また、「学校研究の進め方」をできるだけシンプルなものとすることで、教職員の業務改善・負担軽減も念頭に置き、研究を進めた。

情報端末の活用については、学年の実態に応じ、「課題や画像の提示」「Google Formsによる資料提示」「Google Meetを使った話し合い」「共同編集」等、効果的な活用方法を検討し、ブロック別に各1回の授業研究会を経て、研究発表会当日を迎えた。

## 3 実践事例

### (1) 第2学年 道徳「黄色いベンチ」

#### ① 主なねらい

みんなで使うものを大切にできなかったことについての多様な感じ方や考え方を出し合い、吟味する過程を通して、みんなで使うものを大切にすることや、そのためのきまりの意味について理解し、自己の生き方を考えることで、約束やきまりを守り、みんなが使うものを大切に育てる。

#### ② 情報端末の活用

ア 子供たちが抱える問題意識を共有するため、導入時にGoogle Formsによるアンケート結果の提示

イ Google Formsを活用した記述式による振り返り

### (2) 第4学年 理科「ものの温度と体積」

#### ① 主なねらい

温度の変化に伴い体積が変化することを調べる中で、既習の内容や生活経験を基に、根拠ある予想や仮説を発想する力や、主体的に問題解決しようとする態度を育てる。温度による水の体積変化について、実験の結果から考察し、表現することができるようにする。

#### ② 情報端末の活用

ア Google スライド⇒自分の考えを入力する（写真、テキスト）

イ Google Meet ⇒グループごとに話し合い、グループのまとめを作る

### (3) 第5学年 外国語「Where is the post office?」

#### ① 主なねらい

自分の知りたい場所や位置を尋ねたり、相手を案内したりするために、場所や位置の尋ね方や答え方などについての短い話を聞いて、その概要が分かったり、伝え合ったりすることができるようにする。

#### ② 情報端末の活用

ア 「Kahoot!」のアプリを使った単語確認

イ 「Flip」のアプリを使った録画（学習した表現を使っのペア練習）

ウ スプレッドシートでの毎時間の振り返り

### (4) 特別支援学級 国語「はっけんしたよ」

#### ① 主なねらい

視覚、聴覚、触覚など様々な感覚を使った表現の仕方を知り、それを言葉で表すこと、それらで集めた言葉を使って簡単な文章を書くことができるようにする。

#### ② 情報端末の活用

ア 文字の練習

イ ヒントの提示

ウ ジャムボードを有効活用した、色や形が具体的に分かる視覚支援



## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・情報端末の活用方法を研修するよい機会となった。
- ・情報端末の活用による授業の効率化と「対話的な学び」の道筋が見えてきたこと。児童が情報端末の操作に慣れ、普段の授業でも有効に活用できるようになってきた。
- ・「川越市小・中学生学力向上プラン」「Kasumi Styleの整理」により、授業展開の見通しをもつことができ、教えやすく学びやすい環境が整ってきた。
- ・学年単位で動くことが多くなり、効率よく授業の準備や研究発表の準備を進められた。また、部会等の時間を削減でき、一層、授業改善を中心とした取組となった。
- ・他校の先生方からご意見、ご感想、実践例のご紹介をいただき、有意義な研究協議会となった。

### (2) 課題

- ・情報機器の活用方法の共有化と、より一層のスキル向上。（教師も児童も）
- ・情報機器活用と学力向上との相関関係を検証する方法
- ・学校研究を含む校内研修、諸会議、学年会、学級事務等のバランスを考えながら、限られた時間の中でどのように行うのかの検討と調整。

目指す児童像系統表(令和3年度～)

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
低学年	学習課題に興味や関心を持ち、自分の考えを持つことができる児童	自分と友達の考えが同じところや違うところを見つけられる児童	自分の考えを見直し、修正し、まとめや振り返りを次に活かせる児童
中学年	学習課題に興味や関心を持ち、進んで解決しようとする児童	自分の考えと友達の考えを比較し、よさや違いに気付き認め合うことができる児童	学習したことを基にして、よりよい考え方や新たな課題を見つけられる児童
高学年	自ら課題を見つけ、粘り強く解決に向かうことができる児童	自分たちの意見をまとめ、結論を導き出し、よりよい考えを創り出せる児童	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて、より深く理解できる児童</li> <li>学んだことを応用・深化させて活用できる児童</li> </ul>

< 児童の実態に合わせた授業展開例 Kasumi Style >

Kasumi Style		A	B	C	
展開の指針		適用問題で自力解決の力をつける	自力解決の力を持つ	学び合いを充実させる	板書用カード
導入	課題をつかむ	全体	全体	全体	問題・課題
	見通す	全体	全体	全体	見通し
展開	自力解決	グループや全体で協力して問題を解決 ↓ 全体に発表 ↓ 全体で練り上げ	個人	個人	解決
	集団解決		グループで練り上げ ↓ 発表	グループで発表 ↓ 練り上げ ↓ まとめ	
まとめ	まとめ	全体	全体	全体で確認	まとめ
	適用問題	個人	個人	個人	適用問題
	振り返り	個人	個人	個人	振り返り

## 研究主題

# 「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」

～デジタル教科書・ICTを活用した指導法の工夫～

川越市立初雁中学校

## 研究のポイント

- 「できるだけ普段通りの流れの中で無理なく」を心がけた。
- 「こういう機会だからこそできることを」ということも大切にした。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校は、令和3年度埼玉県英語指導方法改善事業(文部科学省委嘱「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」)における研修協力校として、小学校との連携を通じて「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」に取り組んだ。令和4年度はそれを引き継ぐ形で、デジタル教科書やICTを活用した指導法の工夫について研究を進め、生徒の英語力の向上を目指した。

### (2) 研究主題設定理由

新学習指導要領の趣旨を体現するために、「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」が必要である。そのために、従来の指導方法の見直し、新しい教科書についてのより深い教材研究が求められる。また、1人1台端末が導入されたことを生かし、学習者用デジタル教科書の活用方法を模索する良い機会であると考えた。

### (3) 研究組織

- 授業研究部・・・英語科4名
  - ・授業研究会に向けての指導案作成
- 学習企画部・・・各教科1名+複式2名
  - ・授業で取り組んでいるICTの活用事例
  - ・小中連携を意識している取組(教科・教科外)
- 学力分析・調査記録部・・・5教科各2名(英語科を除く)+保健体育1名+複式2名・養護教諭
  - ・埼玉県学力学習状況調査の分析
  - ・生徒質問紙の回答と学力の伸びの関係等

## 2 研究の内容

### (1) 本校英語科の重点目標

- ① ICTを効果的に活用した授業の実践
- ② 言語活動の充実を目指した授業改善の推進
- ③ 指導計画の作成と指導改善のための指導・評価サイクルの確立

## (2) 指導形態の工夫

昨年度を引き継ぐ形で2年生は完全なティーム・ティーチングで行っている。英語科の人数が昨年度から1名減ってしまったので、入門期の指導を充実させるために1年生全学級で週1回ティーム・ティーチングを行っている。

## (3) 定期的な英語部会の開催

定例の教科部会の他、朝の短時間を活用し、「朝活教科部会」を随時行い、指導方法、評価方法等について情報交換や話し合いを行い、授業改善に生かしている。

## (4) ICT を効果的に活用した指導方法の工夫

① 場面：音読、単語練習、問題演習、言語活動、班での意見交換等

② 活用法：個に応じた活動、意見の共有場面

英語科では Google Forms や Google スライドを最大限に活用している。特に1学年の英語の Classroom はほぼ毎日と言ってもよいほど資料や課題を掲載したり、生徒が解答(回答)を送信したり、活用を深めている。2学期後半からは事実上のハイブリッド授業(半数の生徒を対面で、半数の生徒をオンラインで同時に授業)が展開されている。

## (5) 学習者用デジタル教科書の活用

① 学習者用デジタル教科書

学習者用のデジタル教科書を活用することで、例えば教科書の読み練習の場面であれば、自分にあった練習が可能になり、速さ、回数等を選んで練習ことができる。家での練習も可能となるので、個別最適な学習を進めることができる。



また、デジタル教科書に従来の紙の教科書と同様、書き込みをすることもできるため、教員が電子黒板で回答や手本として見せるものと生徒元が一致し、生徒にとってわかりやすい授業を展開することができる。紙の教科書であれば色ペンを使用することに躊躇する生徒もいるので、デジタル教科書であれば書き込みをすることもできる。

② 教師用デジタル教科書

英語科であれば、デジタル教科書の中に音声、文字、日本語訳、ピクチャーカード、単語のフラッシュカード等があるため、AET の配置のない日でも音声による導入や練習を行うことは可能である。

③ 課題及び将来を見据えた際の不安や疑問

ア 年度初めから使用できない。(教育委員会で一括登録をする関係)

イ 登録を任せられるのは、現場としては有難いが、レントランスの仕組み等や紐付けの仕組み等は知らされていないため、転入生があったときなどにも素早く対応できるのか不安である。

- ウ 紙媒体の教科書がなくなったときの教科書関係の書類の対応  
(教科用図書給与証明書等の取扱い等)
- エ デジタル教科書1学年1人分の価格がわからない。
- オ 希望すれば他社の学習者用デジタル教科書を購入することはできる  
のか。(紙ならばすぐに買える)
- カ 進級したときに復習で教科書を使用したくなったらどうなるのか。
- キ 教科書改訂で採択する出版社が変わったときはどうするのか。
- ク デジタル教科書に書き込みをさせたり保存したりさせたが、来年度  
はこれらのデータは見るできない。

### 3 実践事例

#### (1) 英語科における授業研究

- ① 1学年 学習者用デジタル教科書を活用した授業  
学習者用デジタル教科書と学習端末を随所に活用した授業。個別最適化を目指し、全体指導、個人練習、問題演習等、様々な場面で工夫して ICT を取り入れ、文法の理解を確認する授業を展開した。



- ② 2学年 「話すこと」を中心においた授業  
6人のAETを招き、スピーキングをメインとした授業を展開した。今回のスピーキング活動のテーマは「川越の紹介」とした。総合的な学習の時間「初雁タイム」との教科横断的な学習としてこのテーマを設定した。身近な自分たちのふるさと川越の魅力について調べたことを、スライドにまとめ、初めて川越を訪れる外国人を相手に、相手に伝わるように工夫して話す活動を行った。生徒自身の「伝えたい」気持ちを大切に活動を展開した。昨年度は、小学校の教室と中学校の教室をMeetでつなぎ、同時双方向のハイブリッド授業で小学生を相手に「中学校の紹介」を行った。昨年度からの引き継ぎのスピーキングの取組を成功させた。



- ③ 3学年 「書くこと」を中心においた授業  
教科書の「発展学習」のページを用いて、「思わず書きたくなる」ような英作文の授業を、本校AETとのティーム・ティーチングで展開した。ライティングのテーマは「選挙の大切さについて」とした。社会科の公民での学びを活用し、教科横断的な授業を展開した。



## (2) 各教科での現状分析と取組の確認

- ① 現状分析（1学期の取組総括、各種調査等分析、評価・評定、ICT機器活用等）
  - ② 2学期に向けて（学力向上プラン、ICT機器活用等）
  - ③ 学校研究に向けて（①授業で取り組んでいるICTの活用事例 ②小中連携を意識している取組）
- 教科ごと、学年ごとにそれぞれで現状分析と課題の掘り起こしを行い、今後の指導方針や計画を検討した。

## 4 研究の成果と課題

### (1) 埼玉県学力学習状況調査における成果

- 中学3年生 令和4年度 本校 57.64% 埼玉県 55.92% 差+1.72%  
令和3年度 本校 62.10% 埼玉県 62.60% 差-0.5%  
研究によって、県平均を下回っていた学年が県を上回る成果を得た。
- 中学2年生 令和4年度 本校 61.67% 埼玉県 59.03% 差+2.6%  
入学当初から完全ティーム・ティーチングや小学校との連携を行っていた学年である。研究の成果がしっかりと学力に現れている。
- 中学3年生だけの推移を見ても、県平均との差は、令和2年度+1.1%、令和3年度+1.2%、令和4年度+1.7%と経年ごとに県平均との差が+に広がっている。

### (2) 研究から得た成果

- さまざまな教材・教具を活用し、指導法を工夫して、全体として4技能5領域をバランス良く育成する英語教育を実践することができた。
- 教科部会や授業公開等を行うことで英語科内で互いに高め合いながら4技能5領域をバランス良く育成する授業づくりを進めることができた。
- 今年度の1年生においては、デジタル教科書を最大限に活用することができた。
- 指導者から直接の指導を受けることで、指導案の書き方や授業づくりについての力を身に付けることができた。
- 他教科でもICTを積極的に活用した教科指導の研究に取り組むことができた。
- 分散登校による「強制ハイブリッド授業」から、全職員がGoogle Meetを活用した授業を実践することができるようになった。

### (3) 研究から得た課題

- 「やってみなければわからない」ことも多い中で、学習者用コンピュータの使用やオンライン授業の実施等に制限があったこと。
- 今回の研究を通して、今後も授業におけるデジタル教科書・ICT活用についての研究を深めていきたい。

# 「個別最適な学びと協働的な学びを実現する算数科授業」

～ I C T の効果的な活用を通して～

川越市立新宿小学校

## 研究のポイント

- 一人一人の学力や特性に合わせて、支援が必要な児童に重点的な指導を行うとともに、理解が進んでいる児童の力をより一層伸ばしていく学びの場を整えることで、「指導の個別化」を図る。
- 児童一人一人の興味・関心に応じて、児童が学び方を自ら選択したり、単元内でもコースを変更できる機会を設けたり、児童自身が自分の学習が最適となるよう調整できる学びの場を整えることで、「学習の個性化」を図る。
- 「個別最適な学び」が孤立した学びにならないよう、ペア学習やグループ学習を取り入れ、一人一人の考えが、異なる考え方と組み合わせたり、よりよい考えが生まれるよう、「協働的な学び」の機会を設ける。また、I C T を効果的に活用していく。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

今年度より、2年間、川越市教育委員会の委嘱を受け、研究主題を「個別最適な学びと協働的な学びを実現する算数科授業～I C T の効果的な活用を通して～」とし、全職員で取り組んでいる。「どのように指導するか」以上に「どのように学ぶか」に重点が置かれている今、教師は児童にとって学びやすい環境を整えることができるようにする。また、協働的な学びをすることによって、自分の考えのよさ、友達の考えのよさ、共に学ぶことのよさを実感できるようにしたいと考えている。

### (2) 研究主題設定理由

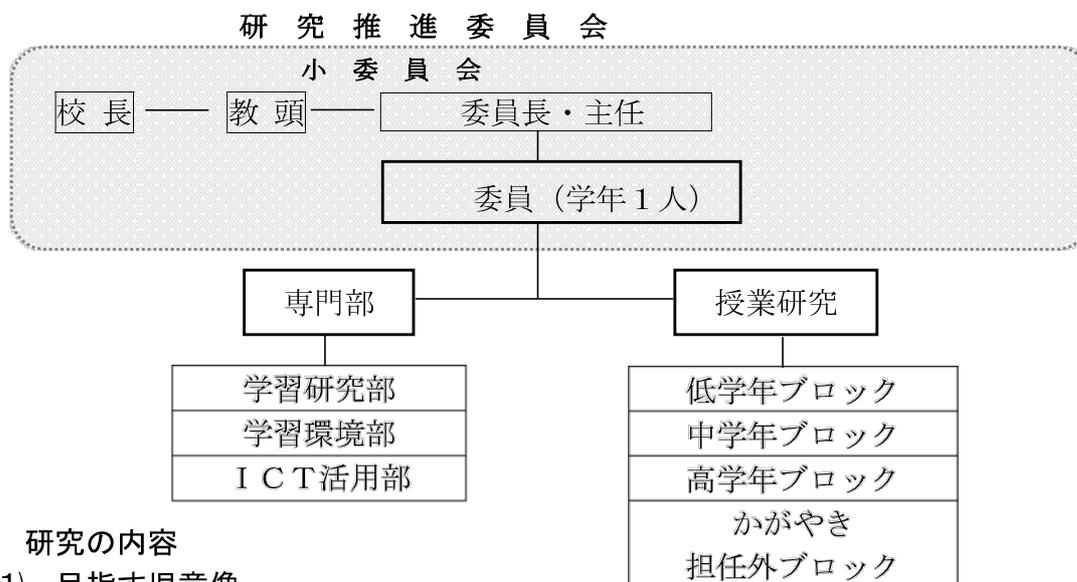
本校では、学校教育目標「やさしく かしこく たくましく」の実現を目指し、日々教育活動に取り組んでいる。算数科における本校の児童の実態として次のことが挙げられる。

- ① 授業や入間学力調査の結果より
  - ・ I C T 活用能力が高い。
  - ・ 知識、技能の習得の個人差が大きい。
  - ・ 読解力が低く、問題文の意味を理解することが苦手な児童がいる。
  - ・ 自分の考えを図、言葉を使って、表現することが苦手な児童がいる。
  - ・ 互いの考えを比較検討することが苦手な児童がいる。
- ② 県学力調査の結果より
  - ・ 資質・能力の個人差が大きい。
  - ・ 記述式の解答率が低い。
- ③ 社会的背景として
  - ・ 社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来

- ・新型コロナウイルス感染症の拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」
- ・自分のよさや可能性を認識し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越える力が必要となる。

本校では、算数科の学習を通して、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」が実現できるように考え主題を設定した。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

### (1) 目指す児童像

- ・基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けた児童
- ・自分の考えを表現し、互いの考えを比較検討できる児童
- ・算数のよさに気付き、生活や学習に活用できる児童

### (2) 研究仮説

- 仮説 1. 指導の個別化を充実させることにより、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けることができるであろう
- 仮説 2. 協働的な学びを工夫することにより、自分の考えを表現し、互いの考えを比較検討できる児童が育つであろう
- 仮説 3. 学習の個性化を充実させたり、学習を振り返らせ、適切な評価をしたりすることにより、算数のよさに気付き、生活や学習に活用できる児童が育つであろう

### (3) 各専門部の取組

#### 学習研究部

- ① 「指導の個別化」の取組
  - T Tの指導形態の検討
    - ・個別支援
    - ・小集団指導
  - 個に応じた支援方法
    - ・ヒントカード
    - ・ヒントコーナー
- ② 「協働的な学び」の取組
  - じっくりコース、低学年のペア学習

③ 「学習の個性化」の取組

○コース別学習の進め方

- ・習熟度別だけでなく、「学び方別」のコース別学習
- ・単元途中でもコースを選択できる

④ 「適切な評価」の取組

- ・振り返りの視点を明確にする
- ・振り返りを蓄積する（学びのあしあと）
- ・評価場面や規準について、明確化



ICT活用部

① 「指導の個別化」の取組

- ・ICTの活用場面を教師主体から子ども主体へと移行

② 「協働的な学び」の取組

- ・意見の共有をICTによっても行えるようにする

③ 「学習の個性化」の取組

- ・デジタルドリルの活用

④ 「適切な評価」の取組について

- ・「学びのあしあと」の作成



学習環境部

① 「指導の個別化」の取組

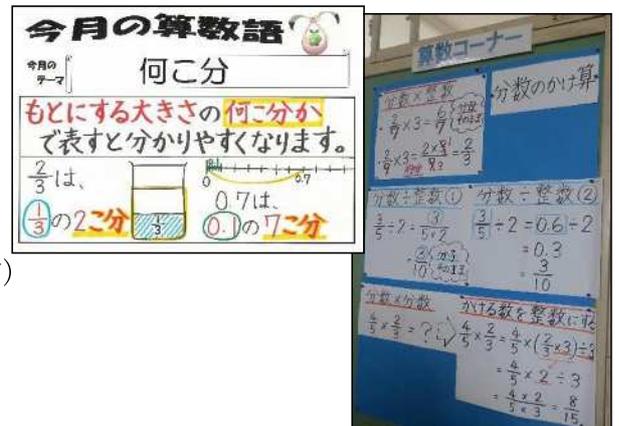
- ・算数用語 ・算数語の整理、共有

② 「協働的な学び」の取組

- ・グループやペア学習の活用

③ 「学習の個性化」の取組

- ・算数コーナーの設置
- ・算数チャレンジのClassroom（算数検定）



その他

- ・算数教具の整備活用
- ・授業の黒板掲示の統一
- ・本校校長や学習支援員などが中心となり、希望者を対象とした、少人数学習教室（スマイル教室）の実施

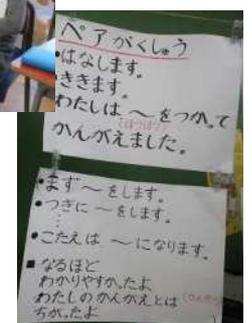
3 実践事例

今年度行った研究授業について、主な取組を報告する。

○1年生「たしざん」

- ・ペア学習の際、昨年度までの国語科の研究で活用していた話型を活用した。

→話型を取り入れることで、どのように話し合いをすればよいのかわかり、1年生でもスムーズに自分の考えを相手に表現することができた。



○3年生「大きい数のかけ算のしかたを考えよう」

- ・45分間の授業の課題提示の後、コースを選ぶという取組を行った。
- 自分に合った学び方を選ぶというように、児童自身で学習が最適となるように調整する姿が見られた。
- ・低位のグループにおいて、小集団のヒントコーナーを設けた。
- 納得がいった時点で児童は自席に戻り、自力解決を続ける。児童が自信をもって、自力解決に取り組む姿が見られた。
- ・グループ学習を中心に学習を進めるコースを設けました。
- 児童同士で学び合いが自然と生まれ、伸び伸びと学習に取り組む姿が見られた。
- ・自分の考えの説明をする際に、「まず、次に、だから答えは〇〇です。」という基本形を示した。
- ほぼ全員が自分の考えをグループやペアの人に説明することができた。



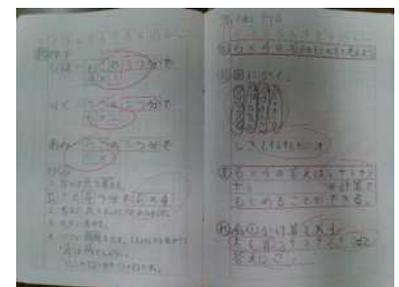
○6年生「分数のわり算を考えよう」

- ・Google formsを使用して、段階ごとのヒントカードを作成した。
- 教師のヒントを待つのではなく、児童が自分のタイミングで必要なヒントを選んでいる姿が見られた。



○かがやき学級「かけ算」

- ・特別支援学級の授業で、一人一人の学習に合わせたノートを作成した。
- 見通しをもち、自分のペースで学習する姿が見られた。
- ・毎時間、学習や生活の基盤となる認知機能を高める「コグトレオンライン」の「数える」に取り組んだ。
- 児童の学習に対する意欲、数えたり、計算したりする力が高まった姿が見られた。10月以降は1～4年生全員と、高学年のスマイル教室の希望者もコグトレに取組、自分のペースで自分の力を高めることができる環境を整えた。



#### 4 研究の成果と課題

##### 【成果】

- ① 研究授業を通して、ICTの活用法が見えてきた。
- ② また、学習の個性化を意識した単元計画を立てることによって、児童が意欲的に学習に取り組んでいる姿が見られた。

##### 【課題】

- ① 教師が何に取り組んだかではなく、取り組んだ結果、児童の姿がどのように変容したかで、研究の成果を見取れるようにしていきたい。
- ② 今年度、手立てとして挙げたものについて、来年度はさらに実践していきたい。
- ③ 来年度、さらに、ICTの効果的な活用について、今後も検討を重ねていく。

## 研究主題

# 「自他を尊重し合い、よりよい生活づくりに主体的に参画する児童の育成」

～合意形成のよさを実感することのできる学級活動の充実～

川越市立南古谷小学校

## 研究のポイント

- 学級活動（１）を中心として、本校の目指す児童像の達成を図る
- 学級活動（１）で培った資質・能力を他教科や活動などに生かせるようにする

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

学級活動（１）を軸として本校の主題である「自他を尊重し合い」「よりよい生活づくり」「主体的に参画」のキーワードを元に、本校の目指す児童像に迫りたい。

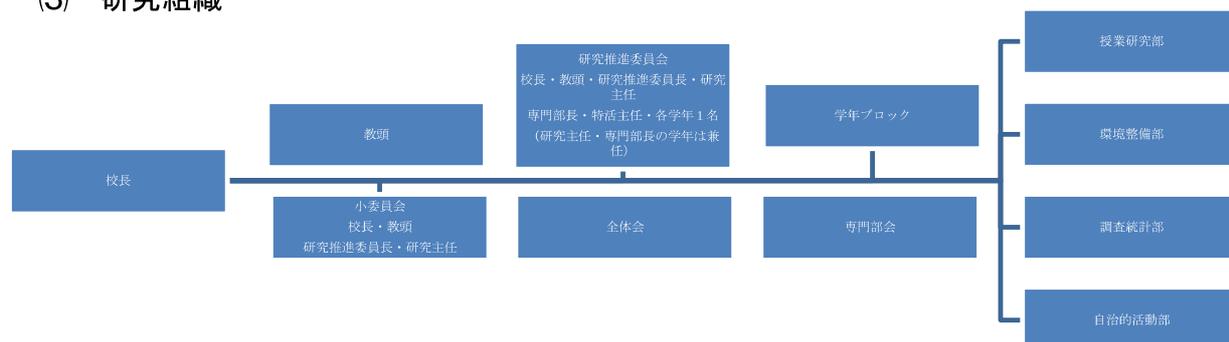
- ① 「自他を尊重し合い」とは、対話をしながら相手を思いやったり、考えを受け入れたりすることと捉えている。相手を認め合い、よりよい考えを広げていける児童を育成したい。
- ② 「よりよい生活づくり」とは、自分や学級、学校の諸問題について気づき、改善していくことと捉えている。自ら課題に気付くことで、話し合う意義を明確に持ったり、自分がどうありたいかを見つめ直したりすることができる。実践後に振り返ることで、学校生活に生かすことのできる児童を育成したい。
- ③ 「主体的に参画」とは、児童が明確な課題意識をもち、どのような行動をすれば解決できるかを考え自分から進んで様々なことに参加しようとする事と捉えている。そのような行動が、特別活動のみならず、普段の生活にも波及していくことで、よりよい学級・学校をつくり上げていこうとする児童を育成したい。

### (2) 研究主題設定理由

令和元年度末の職員アンケートから、生徒指導上の問題が多く、学級経営についての充実を図りたいという回答が見られた。その中で、児童に「対話する力をつけてほしい」「相手を思いやってほしい」「自分から進んで動いてほしい」「他者との関わりを深めたい」「自己有用感を高めたい」「学習規律を徹底したい」などが教師の願いとして挙げられた。

小学校学習指導要領においても「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること」と示されている。この学級経営の充実において、学級の雰囲気や人間関係が、児童の人間形成に与える影響はとても大きい。そこで学級活動（１）を通して、学級経営の充実を図り、教師の願いを実現することとした。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

# 目指す児童像

### 人間関係形成

お互いのよさや違いを認め合いながら、よりよい考えをもって話し合ができる子

### 学級活動(1)

よりよい学級・学校生活づくりのため、工夫や諸問題の解決に向けて進んで提案できる子

自分の役割を理解し、自分のよさや可能性に気づき、活動を振り返ることができる子

社会参画

自己実現

重点

#### 社会参画の意識を育む事前の活動

事前の活動において、工夫や課題の見つけ方を知り、課題意識を全体で共有する工夫をすれば、よりよい生活づくりに向かうための工夫や諸問題の解決方法を理解することができるであろう。

#### 人間関係形成力を高める話し合い活動

本時の活動において、話し合いの仕方を繰り返し指導し、合意形成の仕方を工夫し実践すれば、お互いのよさや違いを尊重し合いながらよりよい考えを持つ力が身に付くであろう。

#### 自己実現につながる振り返り活動

事後の活動において、振り返りの視点を明確にし、一連の活動の価値付けを繰り返せば、自分のよさや可能性に気づき、主体的に参画する態度が育成されるであろう。

授業

#### 授業研究部

- ・計画委員会の指導
- ・問題の発見と問題意識を高める指導
- ・合意形成の仕方
- ・実践の振り返りの充実

実態把握

#### 調査統計部

- ・学級力アンケートによる課題発見
- ・学級活動や話し合い活動への意識調査
- ・委員会活動等への意識調査

環境

#### 環境整備部

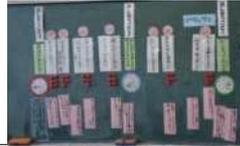
- ・幅広く実態に合った議題例
- ・学級会グッズ
- ・学級会や係コーナーの充実
- ・話し合いにおけるICTの活用法

委員会クラブ

#### 自治的活動部

- ・児童会活動、クラブ活動の自治的活動の充実
- ・児童会・クラブコーナーの充実

### 3 実践事例

<p><b>【高学年ブロックの実践】</b>  <b>議題： 林間学校に向けてクラスの協力アップ作戦をしよう。</b>  <b>話し合いのめあて： みんながやる気をもって協力できる作戦を考えよう。</b></p>	
事前の手立て	<p><b>年間指導計画の作成</b></p>  <p>高学年の実態に合わせて、1年間を見通した年間指導計画を作成した。</p> <p><b>提案理由の練り上げ</b></p>  <p>練り上げでは、クラスでの様子、解決方法、解決後を考えることで提案理由が明確になり、課題意識を共有できた。</p>
本時の手立て	<p><b>提案理由の掲示の工夫</b></p>  <p>提案者がスライドを用いて発表し、議題を自分事として捉えられるようにした。</p> <p><b>短冊の活用</b></p>  <p>意見の理由を色分けして掲示し、理由をもとに全員が納得して決定できるようにした。</p>
事後の手立て	<p><b>学級のあゆみ</b></p> <p>学級活動や学校行事などの実践の様子や感想を掲示することで、自分たちの実践活動に自信や達成感をもち、活動を価値付けられた。</p> <p><b>実践に合った振り返りカードの作成</b></p> <p>決まったことに対して、全員で取り組み振り返りを行うことで、クラスの一員として自己有用感を高められるようにした。</p>
<p><b>【中学年ブロックの実践】</b>  <b>議題： 学級力向上キャンペーンの内容を考えよう</b>  <b>話し合いのめあて： お互いの仲をもっと深めることができるようなキャンペーンの内容と工夫を考えよう。</b></p>	
事前の手立て	<p><b>学級力アンケート結果を活用した議題選定</b></p>  <p>学級力アンケートに取り組み、結果をグラフ化して掲示しておき、課題や問題をつかむためのきっかけ作りを行った。</p> <p><b>提案理由の練り上げの支援</b></p>  <p>練り上げの場面の掲示物を用意して、意見のまとめ方について視覚的に理解できるようにした。</p>
本時の手立て	<p><b>反対意見への対応</b></p> <p>反対意見が出た際は、司会から「このことを解決する案はありますか。」と投げかけ、全体で考えを出し合い、話し合いを進められるようにした。</p>
事後の手立て	<p><b>学級力アンケート2回目の実施と分析</b></p>  <p>実践後に学級力アンケート2回目を行い、自らの活動や集団としての歩みを振り返ることで児童自身が自己評価を適切に行い、次の活動に活かせるようにした。</p>
<p><b>【低学年ブロックの実践】</b>  <b>議題： 南古谷小学校150才のお祝いをしよう</b>  <b>話し合いのめあて： 南古谷小学校が喜ぶ、お祝いを考えよう。</b></p>	
事前の手立て	<p><b>議題選定</b></p> <p>議題を選定の支援が必要なため、議題の例を挙げたり、児童の願いを聞いたりして議題を決定した。</p> <p><b>提案理由の練り上げの支援</b></p>  <p>提案理由を、①現在の様子②解決方法③解決後の姿が明確になるように、カードの書き方と板書の仕方を工夫した。</p>
本時の手立て	<p><b>司会者用「おたすけカード」の活用</b></p> 

手立て	賛成・反対意見に対しての返し方や意見のまとめ方についての支援カードを用意し、できる範囲で自分達の力で決定したという経験を積み重ねさせていった。	
事後の手立て	実践に合った振り返りカードの作成	自らの活動を振り返って自己評価を行ったり、友達の頑張りを評価したりできるカードを用意し、自己肯定感やクラスへの帰属感を高められるようにした。
【特別支援学級の実践】 議題： 2学期がんばったねの会をしよう 話し合いのめあて： 2学期を振り返り、お互いにがんばりを認め合えるような活動内容を考えよう。		
事前の手立て	個別のめあて・支援の手立てを設定	議題ポストの設置
	児童一人一人に対して、個別のめあてを具体的に立てた。また、支援の手立てでも、誰が誰にいつ支援をするのかを明確にした。	話し合いたい議題を提案する”願いを叶えるカード”では、年齢に合わせて、選択式と記述式を用意し、誰もが発信できる環境を整えた。
本時の手立て	話し合いに主体的に参加するための工夫	表を活用して意見を決定
	動画、字幕の用意、ロールプレイ、劇等で、自発的な活動ができるようにした。	表で、意見が提案理由に沿っているかどうか視覚的に分かるようにした。
事後の手立て	一連の活動の掲示	実践に合った振り返りカードの作成
	これまでの話し合い活動を掲示し、児童に自信や達成感を持たせた。	実践後には、振り返りの視点を明確化したカードを用意し、活動の価値付けを図った。

#### 4 研究の成果（○）と課題（●）

- 教師主導ではなく、児童が中心となって話し合う力が身に付いてきた。
- 合意形成の際、それぞれの意見を合わせて、よりよい意見を形成させていくことよさを経験させることができた。
- 学級会で決まったことを実践する中で、主体的に取り組む姿が見られるようになった。
- 自分の意見を伝える力が付き、異なる意見や少数意見を認める態度が育ってきた。
- 議題を自分事として捉え、同じ土俵で話し合えるように共通理解をしっかりと図っていくことが必要である。
- 提案理由に沿って話し合う力を高めていくことが課題である。
- 心配意見や反対意見をどのように扱い、折り合いを付けさせていくのか、学級会の実践を積み重ねながら研究をしていく必要がある。
- 計画委員との打ち合わせや学級会準備をする時間の確保等、より効率的・効果的に事前の準備をしていくかが課題である。

## 研究主題

# 「児童一人一人が学ぶ喜びを実感できる授業づくり」

～「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習指導の工夫を通して～

川越市立霞ヶ関南小学校

## 研究のポイント

本研究は、小学校国語科における「自分の考えをもち、表現できる児童の育成」を目指したものである。学習したことに対する自分の考えをもち、自分の言葉で表現することができるようにするために、視点を明確にした振り返り指導を行う。1単位授業を「めあて（課題）」「見通し」「解決（学び合い）」「まとめ」「振り返り」の5過程のステップにおいて、目的に応じて振り返りを促す言葉かけをする。また、「振り返り」において「振り返りポイント」を活用し、課題に沿った振り返りになるような視点を明確にして指導を行う。このような指導が、学習したことに対し自分の考えをもち、表現する力の向上に有効であることを、実践を通して明らかにする。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

- ① 学習指導要領等を基に、研究主題・副題の基本的な考え方を明らかにする。
- ② 児童及び教師を対象とした実態調査や意識調査などから、指導上の課題を明らかにする。
- ③ 指導事項等をもとに、課題に応じて読む能力を設定する順序及びめあてに応じた話し合い活動の内容を明らかにする。
- ④ 課題に応じて読む能力の育成に適した単元を貫く言語活動の内容や、指導スタイルの位置付けを明らかにする。
- ⑤ 児童の主体性を高め、課題に応じて読む能力を育成するための具体的な指導の手立て（思考ツール）を通して明らかにする。
- ⑥ 授業研究の分析をもとに、研究の成果と課題を明らかにする。

### (2) 研究主題設定理由

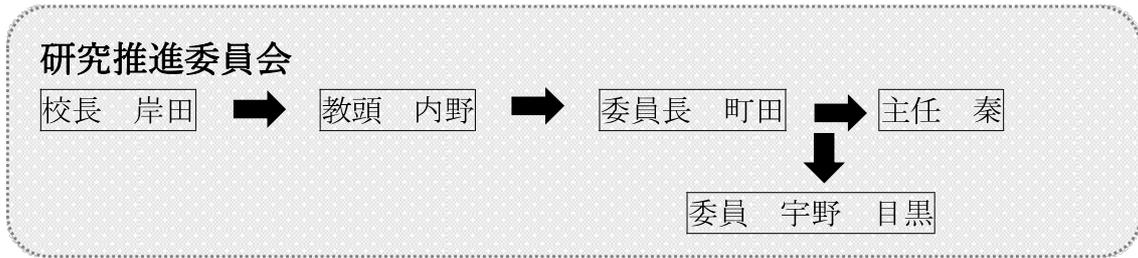
学校課題研究を先導教科としての国語科を位置付けた。

本校は先導教科として国語科を位置づけた。その理由の一つは、国語の能力は実生活に生きて働き、各教科等の学習の基本となる教科と考えたからである。

主体的に思考を深めたり、自己表現したりするなどの活動には、言葉の学びが重要な役割を担っている。そして、協働的な学習に不可欠な伝え合う力は言語を通してのやりとりにより成立し、正確に理解したり、適切に表現したりすることができるのは言葉の力によるものであり、さらに、国語科において子どもたちにとっての課題解決の過程となるような学習を教師集団が学ぶ必要があったからである。

教師の経験年数や研修経験においての矛盾として、今までの指導ではいけないのか。どのように変えればよいのかという疑問も多く出てくることは考えられる。そこで国語科を研究する必要性を感じていた。

(3) 研究組織



低学年ブロック	1年：大平・佐々木 2年：目黒 担外：中村・川名・町田
中学年	3年：長谷川・荒船 4年：宇野・長堀 担外・つくし：相馬
高学年	5年：秦・石山 6年：内野 担外・つくし：勝呂・小島

2 研究の内容

(1) 仮説



仮説1. 見通しを持って活動し、振り返ることで、児童は主体的に学習するようになるであろう。

視点a 見通しを持たせるために、適切な言語活動を設定する。

視点b 単位時間と単元の終末に、次につながる振り返りを設定する。

仮説2. 他者と学び合うことで、自らの考えを広げ、深めることができるであろう。

視点c 学び合いの形に系統性を持たせる。

視点d 思考ツールの活用でより効率的に話し合わせる。

(2) めざす児童像

ブロック	観点	めざす児童像
低学年	主体的	振り返りで、学習内容を確認できる。
	協働的	思考ツールが使える。
中学年	主体的	振り返りで、一般化できる。
	協働的	課題に合った適切な思考ツールを選べる。

高学年	主体的	振り返りで、自分の変容を自覚できる。
	協働的	課題に合った適切な思考ツールを創造することができる。

◎研究対象（具体的な内容）

- ・ 見通しの持たせ方（単元を貫く言語活動を中心とする）
- ・ 振り返りの仕方（単位時間・単元）
- ・ 学び合いの仕方
- ・ 学び合いの系統
- ・ 思考ツールの使い方

### 3 実践事例

#### (1) 指導過程の工夫

指導過程について、「川越市小・中学生学力向上プラン」を基本とした本校の学習スタイルで取り組み、学び方の系統性を作ることにより、児童に学習の見通しと授業に対する安心感をもたせる。どんなゴールをめざして、どんな学習をしていくのか見通しをもつことで学習意欲を高め、安心して授業に臨むことができる。学校で統一した学習スタイルを行うことで、学年、学級のギャップを少しでも少なくしたいと考えた。

単元構想を「つかむ」「ふかめる」「ひろげる」の3次構成とし、1単位授業を「めあて（課題）」「見通し」「解決（学び合い）」「まとめ」「振り返り」の5過程とした。授業の流れが児童に明確に伝わるように指導過程用のカードを掲示する。そして、授業の順序だけでなく、話合いの進め方等も合わせて共通理解を図る。

##### ① 指導と評価の一体化

授業の前半で行った「見通し」と終末で行う「振り返り」により、児童に達成感、満足感をもたせたいと考えた。「見通し」での学習内容が「学び合い」により、深まり、広がりを実感し、次時への学習意欲を高めたり、自尊感情や自己有用感を高めたりできると考えた。

##### ② 「学び合い」の充実

「学び合い」にペア、グループ学習を取り入れることにより、児童の説明する機会を多く設けることができると考えた。思考ツールを使用するなどして聞き方や話合いの進め方が身に付くことにより、学び合いが活性化すると考え、話型や聞く態度についても指導を加える。

##### ③ 発問

全体討議が単なる発表で終わることなく、思考の深まりが見られるようにするために思考を促す発問や焦点化する発問を通してより深い読みができると考えた。

##### ④ 「振り返り」の工夫

「振り返り」では、当初ノートに記述式で振り返りを書くようにしていたが、単元全体が見通せないことや各自のノートを一つ一つ点検する煩雑さから、一目で分かる一覧表に記入するようになった。学習の達成状況も記号で記入させるようにする。これにより児童の学びを短時間に見取ることができるだけでなく、児童が単元を通して自分の学びを客観的に評価できるようにする。また、一人学びや全体討議後に参考になった友達の考えを書き留めさせるようにすることで自分と友達の考え

の違いに気付いたり、比べて読んだりすることができるようにする。

## (2) メタ認知を高める「振り返り」

メタ認知とは自分の認知をより高い次元から客観的に見取り、冷静に評価した上で、それを具体的に制御する能力を意味する。

児童が「振り返り」に自分の考えを書くためには、授業の中でより深く考える場面をつくるのが大切である。「学び合い」の中でよいと思う考えややってみようと思う考えを自己決定させるなどの工夫により、児童が自らの考えを少しずつ変えていったことを「振り返り」に書くことができた。

\*児童にとっての「振り返り」のメリットは、それが自己の学びや考えを整理するよい機会になる。また、振り返った内容を蓄積しておくことにより、自己の学びの軌跡が一目でわかるようになる。これを自己評価すれば自信にもつながる。友達同士による相互評価にも役立てることができた。

\*教師にとってのメリットは、児童の日々のがんばりを「評価」に活かすことができる。児童の「振り返り」を見ることで、児童に合った学習支援ができる。このプロセスを評定に反映させることもできる。また「授業の内容が児童に伝わっているかどうか」もある程度把握できる。うまく伝わっていないと分かれば、次の授業で再度説明したり、授業計画自体を修正したりといった手立てを打つことができた。

## (3) 思考ツールの活用

本校の思考ツールの活用は昨年度から始め、「的確に読む」という点においても成果が見られ、読む目的を明確にし、読み取った情報をつなげながら文章を読解できた。その結果、児童は広い情報の中から解釈をすることができた。

学習の中で、思考ツールは発達段階に即したツールを教師が設定した。国語科における課題解決も同様で、思考する場面、判断する場面、表現する場面など、課題に合わせて、児童が課題解決のステップを考え、それに適した方法を選択し、ゴールまでたどり着くことができるように設定した。

これまで身につけた知識や能力の中から活かせるツールを選び、問題解決をしていく中で、能力を伸ばしたり、新しい方法を見つけたりすることができるようにしたい。思考ツールを活用する経験を積み重ねることで、国語における課題解決の方法や思考・判断・表現の能力を向上させ、より確かなゴールへとたどり着くことができる児童の育成を目指した。

## 4 研究の成果と課題

- ・ 3年間の国語科指導法の研究により、児童一人一人が国語科の学習を通して達成感を得ることができ、話し合い活動や発言等から自信に満ちた児童の様子が見られた。
- ・ 授業を見合うことや一緒に教材研究をすることで、他学年とも連携が取れ、系統的に学習することを意識できた。
- ・ 思考ツールの活用にも次第に慣れ、国語科に留まらず、他教科でも活用する姿が見られた。
- ・ グループ学習や単元を貫く言語活動の手法を、人事異動による職員構成の変化に応じて、どのように維持、発展させていくかが課題である。
- ・ 児童の学力は、まだまだ憂慮すべき状況である。背景としては、学習内容の定着状況や学習意欲の面において、個人差が年々拡大してきていることが挙げられる。

# 「友達と協力し、思考力・表現力を高め合う”太陽の子”を目指して」

～「情報活用能力の育成」を図るICTの活用実践～

川越市立霞ヶ関東小学校

## 研究のポイント

- GIGAスクール構想より「ICT活用実践」
- 「端末アプリ」だけでなく「ブラウザ」も活用

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

近年、知識・情報・技術をめぐる環境が急激に変化しており、サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を融合させることで、これまで実現できなかった社会を実現しようという「Society5.0」時代が到来すると言われている。

このような状況の中、令和2年度より「GIGAスクール構想」が導入され「1人1台端末」や「高速大容量通信ネットワークの整備」が進んだ。文部科学省は「情報活用能力を育成することは、将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくために重要である。」と情報活用能力の重要性を述べている。情報活用能力とは、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力のことである。学習指導要領では、この情報活用能力を学習の基盤となる資質・能力と位置付け、教科等横断的に育成を図ることとしている。



※1

このように「情報活用能力」を育成する重要性が高まっており、予測困難なこれからの社会において「子ども自身で問題を解決したり、そもそもどのような問題があるのか発見したり、それらに対する自分の考えをもったりする力が必要である」と考え、本研究を行うこととした。



※2

また指導者には、ICTや情報教育等で多数の書籍を出版し、学校放送番組「NHK for School」の番組制作協力・番組監修を務めている札幌国際大学 スポーツ人間学部 スポーツ指導学科 准教授 安井 政樹先生を招聘して授業実践を行った。



※3 札幌国際大学  
准教授 安井 政樹 先生

## (2) 主題設定の理由

令和元年12月文部科学省が打ち出した「GIGAスクール構想」。令和2年4月、萩生田光一元・文部科学大臣は、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言を受け、GIGAスクール構想を早期実現するための支援などを積極的に推進すると表明した。「GIGAスクール構想」では「これまでの教育実践の蓄積×ICT＝学習活動の一層充実。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」という式が掲げられた。

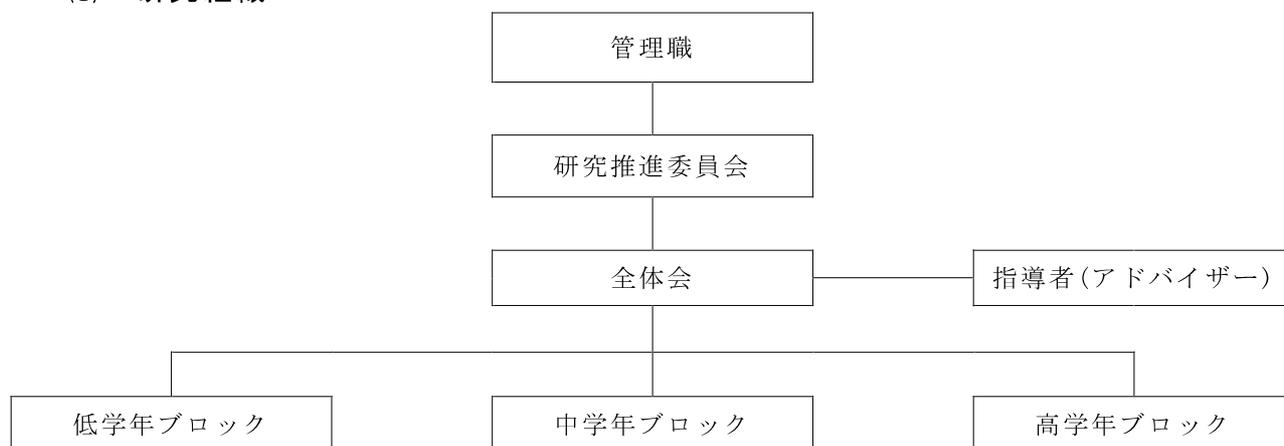
これを受けて本市では、

- ①校内各教室からWi-Fi6による無線でネットに接続できるよう整備。
- ②児童生徒と授業を持つ教職員に学習者用端末コンピュータ（Chromebook）を貸与。

これらの環境を活用し、未来社会を生きる上で当たり前ICTを活用できる児童生徒を育成することが掲げられた。

本校でも令和3年3月に学習者用コンピュータ（Chromebook）が配付された。そこで昨年度（令和3年4月～令和4年3月）は、「まずは使ってみよう」ということから個人研究を中心に学習者用コンピュータ（Chromebook）を使用した。同年度末に教職員対象にアンケートをとった結果「情報教育における分野を絞った方がいい」ということになり、今年度（令和4年4月～令和5年3月）は学習の基盤となる資質・能力と位置付けられている「情報活用能力の育成」に絞り、主題設定を行った。

## (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- (1) 学習者用コンピュータ（Chromebook）のアプリやブラウザなどを「効果的に」活用した授業を行う。
- (2) 情報活用能力（収集、整理・比較、発信・伝達、保存・共有、端末等の基本的な操作、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計）を育成する授業を行う。



イドの変化を共有し、相手に伝わりやすいスライドを作ることや友達と協力して資料を作成することのよさを実感させた。

(4) 令和5年3月1日(水)6校時 4年3組 根岸 和将 教諭・武井 佑樹 教諭 実践  
特別の教科 道徳「NHK for School ココロ部「だれを先に乗せる？」」



本実践では「NHK for School ココロ部!」を用いる。多面的・多角的な考えを交流させるためにも、人物の思いにふれられる情報量が多い資料がよいと考えたからである。また考えを引き出すために手立てとして意図的に無意図の発問「空発問(くうはつもん)」を活用し、児童の意見を引き出していく。児童の対話を教員がファシリテーターとして、思考ツールを取り入れ構造的な「立体型板書」として黒板に書いていく。

#### 4 研究の成果と課題

##### 【成果】

- ・教職員のICT活用能力が上がった。
- ・学習者用コンピュータ(Chromebook)の機能は十分に引き出し、授業をしている。
- ・内臓アプリだけでなくブラウザアプリも活用し、授業している。

##### 【課題】

- ・学習支援ソフト・アプリなどの外部ツールの必要性を感じた。
- ・「情報活用能力」について、大まかな理解しかしていなかったのが教職員でのしっかりとした理解・共有認識することが課題となった。
- ・検証前、検証後のデータが必要であった。

#### 5 画像出典

- ※1…内閣府
- ※2…学びの場.com
- ※3…本人 Facebook アイコン(許可済)
- ※4…教科書スキャン
- ※5…NHK for School 番組画像

研究主題

# 「集団の一員として、自ら考え、自ら活動する広谷っ子の育成」 ～子供の思いを大切にしたい特別活動の実践を通して～

川越市立広谷小学校

## 研究のポイント

- 学級活動(1)において、児童一人ひとりが議題を自分の問題として捉え意欲的に話し合い、実践できる指導方法を工夫する。
- 児童会活動、委員会活動、クラブ活動などにおいても、児童が自ら考え、自ら行動ができる方策に取り組む。

## 1 研究の概要

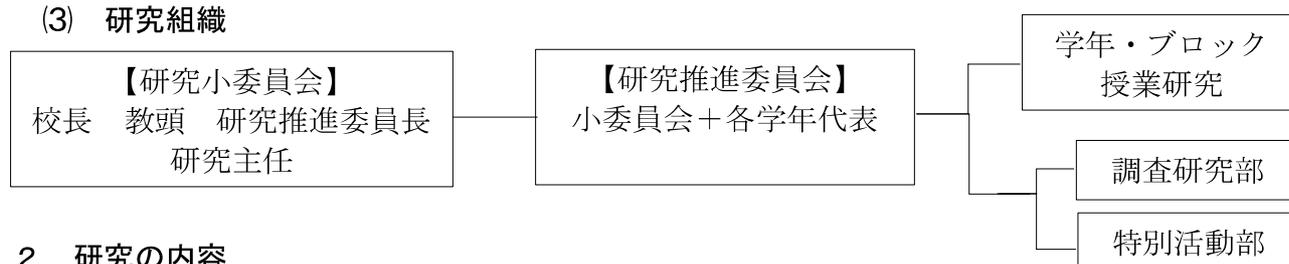
### (1) 研究のねらい

本校は、2年間の学校研究で培ってきた学級活動(1)学級会の話し合いの活動の研究成果として、教師の指導力が向上し、話し合い活動の手順や約束の統一など学級活動の土台となる部分が定着してきた。そこで、本年度は「子供の思い」をより大切に、児童一人ひとりが学級会において議題を自分の問題として捉え意欲的に話し合い、実践できる手立てを研究していく。また、昨年度まで中心だった学級活動(1)の授業研究に加え、児童会活動、委員会活動、クラブ活動などの特別活動全般についても、児童が意欲を持って取り組み、よりよい学校をつくる原動力となる活動ができるよう研究を進める。

### (2) 研究主題設定理由

学年・学級といった「児童が所属する集団」をよりよいものとするために、学級活動・児童会活動・クラブ活動・学年行事などの集団活動を通して、集団や社会の形成者としての見方・考え方を身につけさせ、児童自ら進んで意欲的に活動する態度、よりよい人間関係を形成する力の育成を目指したいと考えた。

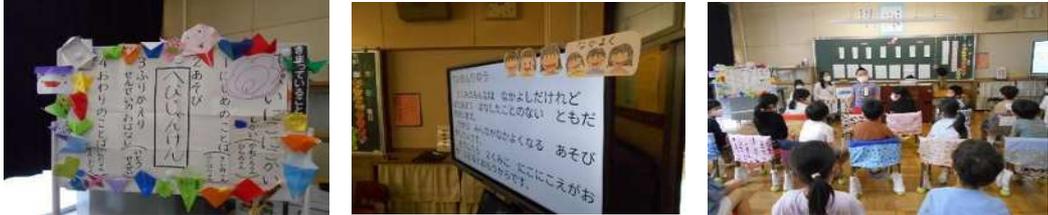
### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- (仮説1)「自分たちの問題として捉え、意欲的に活動する子」  
課題意識を高める事前指導を充実すれば、意欲的に活動する力が育つだろう。
- (仮説2)「互いの考えを生かし、集団がよりよくなるために活動する子」  
互いの意見を認め合い、折り合いをつけて話し合える指導の工夫をすれば、集団がよりよくなるために活動する力が育つだろう。
- (仮説3)「集団で活動することのよさや価値を感じ、支え合って主体的に活動する子」  
よい経験を積み重ね、満足感・達成感を味わわせる評価の工夫をすれば、集団がよりよくなるために活動する力が育つだろう。

### 3 実践事例

学年	<input type="radio"/> 議題 <input type="checkbox"/> 協議内容	・ 指導内容、工夫点 ☆ 指導講評
1 年 生	<input type="radio"/> 「はっぴいにここかいをしよう」 ・ 提案理由の横にキーワードとなるイラストを貼り、視覚的に意識ができるようにした。 ・ 学級会の形は机を使わず、椅子のみを用意して円を描くような形にした。お互いの顔がよく見え、発言しやすい雰囲気できていた。 <input type="checkbox"/> 黒板へ理由を書く際は、賛成の理由だけ書くと、1年生にはわかりやすくなってよいのではないか。 <input type="checkbox"/> 同じ意見（理由）が続いたとき、「他の理由はあるかな。」等の深く考えさせる助言があってもよいのではないか。 ☆ 低学年の段階で「学級会が楽しい！」という経験を多く積ませる。 ☆ 自分たちで考え、決め、実践するという活動を多く経験させる。	
2 年 生	<input type="radio"/> 「1年生をしょうたいしておもちゃまつりをしよう」 ・ 提案理由を1年生と2年生の役にわけて劇で行うことで当日のイメージをわかりやすくした。 ・ 実際におもちゃを作り、遊びの実演をして提案理由に沿った意見が出るようにした。 <input type="checkbox"/> 似た意見を合体させるときは、教員が大まかな分類わけをすることで、話合いがまとまるのではないか。 <input type="checkbox"/> 2つの意見に注目して考えるときは、理由で比べて選ぶとよいのではないか。 ☆ くっつける意見の時は、まとまりを示してあげるとスムーズにできる。 ☆ 学級会を通して決めたことをクラスみんなで協力して実践する楽しさをたくさん味わわせる。	
3 年 生	<input type="radio"/> 「3年2組思い出ブックを作ろう」 ・ キーワードをもとにして、提案理由に沿った話合いができるようにする。 ・ ブックの形を工夫し、ICTを活用して、いつでも自分のタブレットで見ることができるようになる。	
4 年 生	<input type="radio"/> 「1年間の振り返り思い出かるたを作ろう」 ・ 提案理由を児童による劇で行い、どうしてカルタにするのかなど動機付けをしっかりできるようにする。 ・ ①内容②工夫③役割分担の中で②工夫を中心に話合いをさせたい。	

<p>5年生</p>	<p>○「みんなが仲良くなれるお祭りをしよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アイデアボードを作成し、議題になりそうな話題を集めておき、自分たちにとって必要な話し合いは何かを考えられるようにした。</li> <li>・提案理由を、「これまで」「提案」「これから」に分けて作成することで、話し合いの見通しをもてるようにした。</li> </ul> <p>□「仲良くなる」の共通理解を図ることができれば、柱2で話し合いが深まったのではないか。</p> <p>□意見が出なくなってしまったときはどうしたらよいのか。</p> <p>☆「楽しければ仲良くなる」のか、「協力すれば仲良くなる」のか、早めの段階でグループ分けをするか、教師の助言があると話し合いが焦点化できる。</p> <p>☆学級会をすべて計画委員が進めるのではなく、「票が多いから決めてもいいかも。」という周りの声掛けが自然とあがるような雰囲気があるとよい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>
<p>6年生</p>	<p>○「みんなが思い出に残るクラスページを作ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級会に入る前の事前の段階で、児童への声掛けを多く行い、議題が自分事になるようにした。</li> <li>・アルバムの実物やページ数の具体物を用意し、視覚的に理解できるようにした。</li> </ul> <p>□「楽しい」の捉え方の共通理解をもっと図ることができれば、話し合いがさらに深まった。</p> <p>□それぞれの提案の詳細な内容の共通理解が必要ではないか。</p> <p>☆誰かが発言をしたときのクラスの雰囲気（うなずきなど）がとてもよく、話し合いが活発に行われていた。雰囲気がとても大切である。</p> <p>☆意見を決定するとき、同じような理由が並んでいたときには、どちらのほうがり「楽しい」に近づけるのか深い話し合いができるとよりよい決定ができる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>
<p>7 8組</p>	<p>○「ありがとうの会をしよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合う前に提案されている遊びの工夫を「やってみる」ことで共通理解が図れるようにした。</li> </ul> <p>□7つの意見を全部やってみるのは、時間がかかったのではないか。</p> <p>☆やってみて、遊びの時間に出てきた子供たちの意見を取り上げるのがよい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>

## 4 研究部の取組

### 調査研究部

〈取組内容〉

- ・アンケートの作成。年2回の調査、集計、考察

〈成果〉

アンケート結果から、学級をよりよくするための意見や、友達の意見を踏まえたよりよい意見を言えていると実感をもった児童が多い。そのため、自分たちで決めたり、クラスのために活動したりできる学級会が好きな児童が多いと考えられる。事後のアンケート結果から分かる通り、児童は自分たちで実行したり、協力したりするよさを実感していると考えられる。

〈課題〉

司会をして困った時や、先生のアドバイスが必要と感じる時に共通しているのは、「意見が出ない時」となった。児童の姿を見ていると、最終決定をする場面で意見が出なくなる様子が見られた。「よりよい意見を選ぶ」ことはできているが、「よりよい意見を考える」力を高めていく必要があると考えられる。

### 特別活動部

〈取組内容〉

学級会ノート2種類作成・クラブ・委員会の振りり返り作成・学級会ノートを書くときのヒント作成・クラブ・委員会の活動進行の原稿作成・次回の委員会までの流れ(曜日ごと)作成・提案理由の掲示・黒板掲示物(めあて・議題・意見の理由をラミネートしたもので繰り返し使用できるようにした)作成・背面黒板の見本作成

〈成果〉

- ・準備の時間短縮につながった。
- ・提案理由の3つの観点が明確になった。児童が自分事として捉えられるようになった。
- ・黒板に意見の理由を書いたから、比べ合う活動が充実した。
- ・学級会ノートを検討し、改善した。

〈課題〉

- ・各クラブ・委員会での活動が見える化する。(学校のどこかで掲示するなど)
- ・黒板準備の見本があると、児童が準備しやすい。

## 5 研究の成果と課題

〈成果〉

様々な場面で児童の意欲的な姿が多く見られるようになった。学級活動(1)では、児童が学級会の進め方を理解し、見通しをもって活動することができるようになった。そして、教師は適切な支援や助言が増え、ねらいに迫る指導ができるようになってきた。また、机の配置や学級会コーナーなどの環境づくりや学級会グッズなどを広谷小スタンダードとして共通理解することができた。

〈課題〉

学級活動(1)においては、「子供の思い」を入れた議題の選定の仕方や、児童が議題をより自分事として捉えて実践できるための指導の工夫が必要であると感じた。そして、学級会の中での教師のファシリテーション能力を高めていく必要もある。それによって子供たちも意欲的に活動していく力がついていくと考える。

また、学級活動(1)で培った力を他の活動や他教科等でも生かしていき、児童の実践力を高めていきたい。

## 「学力向上＝授業改善×学級づくり」

～課題解決に向けた話し合い活動の充実～

川越市立野田中学校

### 研究のポイント

- 話し合い活動を通じた望ましい学級集団を形成する。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

令和2年度より川越市小・中学生学力向上プランに基づく授業スタンダードの具現化に全教員が取り組み、本年度は深化の年を迎えた。

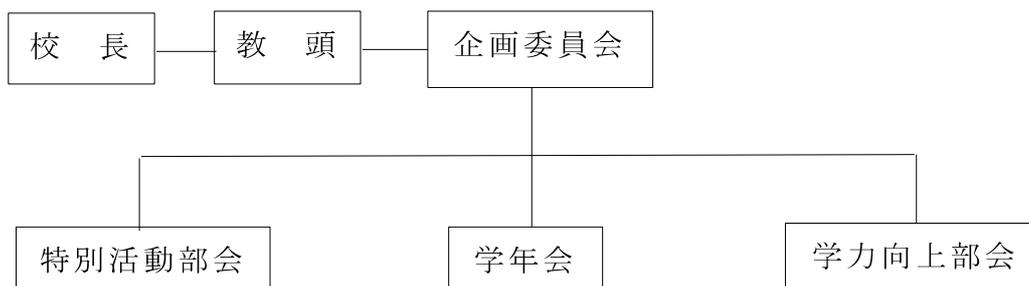
- ① 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて実践的な授業改善に向けた取組を活性化させていき、子どもたちの学びの過程を質的に高めていくことで学力向上を図ることをねらいとする。
- ② 特別活動の中の話し合い活動を充実させることにより、安心して発言ができ学び合える、相手とお互いに高め合える雰囲気がある学級づくりを推進する。生徒のよりよい人間関係や豊かで楽しい学級をつくることが「主体的・対話的で深い学び」の実現に寄与することをねらいとする。

#### (2) 研究主題設定理由

本校の生徒は素直で友人同士の仲もよく、きちんとした態度で学校生活を送っている。その反面、自分に自信が持てない生徒、授業に進んで取り組めない生徒もいる。また、全国学力・学習状況調査「(46) あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」に当てはまると答えた生徒は48.4%で、県、全国の平均より高かった。

このことを踏まえて学力の向上には、生徒の自主的、実践的な態度を育て、授業における学び合いや探究し合う活動を工夫することが有効な手段であること。またその土台として、学級活動の核となる話し合い活動(学級会)を、学び合いの技法を習得する柱として取り組むことにした。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- (1) 校内研修の充実
- (2) 授業研究会の実施
- (3) 西部地区学力向上のための授業研究会発表

## 3 実践事例

### (1) 校内研修

- ① 期 日 令和4年6月 9日 (木)
- ② 内 容 令和4年度校内研修計画について  
川越市小・中学生学力向上プランについて

### (2) 校内研修

- ① 期 日 令和4年6月15日 (水)
- ② 講義名 授業力向上のための支援訪問  
「課題解決に向けた話し合い活動の充実」
- ③ 講 師 西部教育事務所教育支援担当  
熊田 玲子 指導主事
- ④ 内 容
  - ・特別活動（学級活動）の充実
  - ・「柱」「決定」について
  - ・学級ノートの活用



### (3) 校内研修

- ① 期 日 令和4年7月25日 (月)
- ② 講義名 「学力向上＝授業改善×学級づくり  
～課題解決に向けた話し合い活動の充実～」
- ③ 講 師 川越市立教育センター 濫谷 茂之 副主幹
- ④ 内 容
  - ・「学力向上」を図るために
  - ・学級活動委員の役割
  - ・やりきらせる指導、支援

#### (4) 小中合同研修会

- ① 期 日 令和4年8月19日（金）
- ② 内 容 全体会  
分科会（ICT教育、学力向上(特別活動)、生徒指導）



#### (5) 校内授業研究会

- ① 日 時 令和4年9月15日（木）6校時
- ② 授業者 中川 奏 教諭
- ③ 議 題 「学級目標に近づくために」
- ④ 指導者 川越市教育委員会 教育指導課 小松 悦子 副主幹  
川越市立教育センター 澁谷 茂之 副主幹

\* 5校時に他の8クラスも学年ごとに授業研究を実施



#### (6) 西部地区学力向上のための授業研究会

- ① 日 時 令和4年11月15日（火）5校時
- ② 授業者 1年 前田 収 教諭  
2年 藤田 菜緒 教諭
- ③ 議 題 1年 「メリハリのつけられるクラスになるために」  
2年 「修学旅行を成功させるために、普段の生活からできることを考えよう。」
- ④ 指導者 1年 川越市教育委員会 教育指導課 小松 悦子 副主幹  
2年 川越市立教育センター 澁谷 茂之 副主幹
- ⑤ 参観者感想

- ・クラスの実態から課題を見つけ、どのように解決していくかを全員で考えることができていた。黒板やモニターでの視覚的な配慮はとても勉強になった。
- ・人間関係づくりに学級会というのはよい手段になると感じました。話合

いの流れや形式もより深めるためにどのような方法がよいのか学ぶ機会になりました。板書やホワイトボードでの事前準備も指導に活かしたいと思います。



#### (7) 校内研修

- ① 期 日 令和5年1月10日（火）
- ② 内 容 ICTの力でe-授業（いい授業）を実現しよう

#### (8) 校内研修

- ① 期 日 令和5年2月2日（木）
- ② 内 容 来年度に向けて

### 9 研究の成果と課題

#### (1) 成果

- ・特別活動に限らずすべての授業で川越市授業スタンダードが実践されている。
- ・全校、全学年、全教員で特別活動の中の話合い活動に取り組むことができた。学年会で検討してよりよい指導案づくりができ、また授業後の反省会で出された成果、課題も次につながるものになった。
- ・学級会開催のために学級活動委員会を指導していくことが、リーダーの育成にもつながった。自主的に学級の問題点に気付き、学級全員で話合って改善しようとする意欲を持つ生徒が増えた。
- ・小・中連携の一環として、小学校における学級会の様子、準備、工夫などを話し合うことができた。その結果特に1年生は抵抗なく学級会活動に取り組むことができた。

#### (2) 課題

- ・国・県学力学習状況調査等进行分析、比較して学力向上について数値的調査を行う。
- ・小学校との連携をより一層深め、9年間を見通した学力向上を目指す。そのために小中合同研修会を充実させるとともに、教科主任研修会をオンラインで随時開催する。

## 「『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善」

～生徒一人ひとりの学ぶ意欲を引き出し、基礎学力の充実を図る工夫～

川越市寺尾中学校

### 研究のポイント

- 寺尾中学校の生徒の実態をもとに、5つのグループ（人間関係づくり①、人間関係づくり②、学習規律・教室内環境整備、特別支援教育、学習の具体策）で現状分析と改善策を検討、改善策の実行へ向けた研究を行う。
- グループでの研究と並行して、様々な機会を利用して各自の授業改善に向けた研究を進める。お互いに授業を見合ったり、授業研究会を行ったりする。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

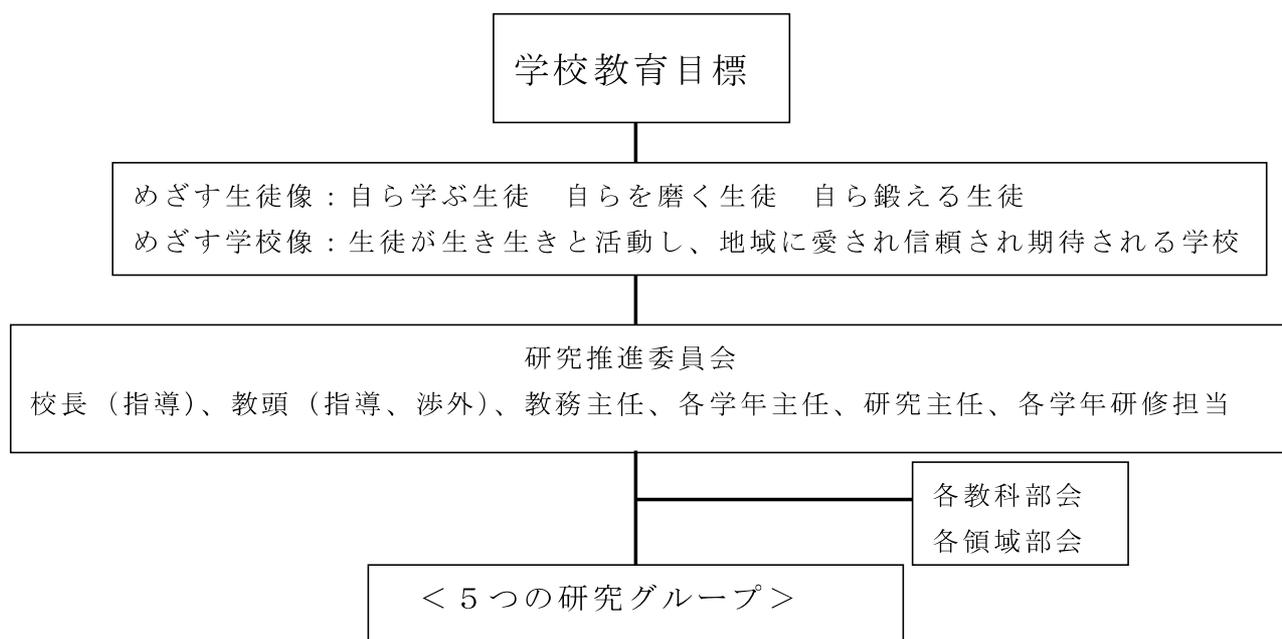
これまで本校で実践してきた教育活動を、研究主題の視点に立って整理しさらに発展させ、学校教育目標の具現化を図る。

#### (2) 研究主題設定理由

「主体的・対話的で深い学び」という言葉が出されてから数年が経った。川越市の授業スタンダードも3年目の「深化」を迎えている。教員の資質の向上も強く叫ばれており、日々の授業を行いながらも研修を重ね、一人ひとりが自覚をもって授業に臨む姿勢が必要である。ともすると毎日の忙しさに流されてしまう恐れもあり、そこで学校研究という形を借りつつ、自分の授業を振り返り、よりよいものに改善する機会としたい。

また、寺尾中学校において、基礎学力の向上は喫緊の課題である。この課題の解決に向けて、私たちは、生徒が学ぶ環境を整え、学ぶ意欲を引き出し、できるなら、学ぶ喜びや楽しさを体験させたい。毎日の授業に少しの工夫を加え、わずかな変化を持たせることで、それが達成できる可能性があると考え、この研究主題を設定した。

### (3) 研究組織



◇研究組織の立ち上げまで～寺尾中生徒の実態を鑑みて～

各教員が授業の工夫を進めると同時に、生徒の学びの土台となる事項について整理し、必要があれば工夫改善を進める。『学びの土台』という観点から、以下の5つのセクションを設定した。

まず、主体的に授業に参加するにあたっては、安心して授業に臨むことができ、その上で、自分の考えや意見、思ったことを発言できるような環境づくりが不可欠である。その一つが『人間関係づくり』であると考えている。本校生徒の日常生活を見ていると、悪気はないのだが言葉が足りなかったり、選ぶ言葉が適切でなかったり、あるいは、人との適切な距離感が身につけていなかったり、ということから、お互いを誤解したり、必要以上に気を遣ったりしている場面がよくある。核家族化が進み、親戚付き合い近所付き合いも希薄となった昨今、さらに新型コロナウイルス感染症拡大による人との接点の減少が拍車をかけて、そういった人との付き合い方や気持ちの伝え方を学校で教える必要が生じている。

本校では、この『人間関係づくり』を教育相談的アプローチとしてソーシャル・スキル・トレーニングを教育課程に位置付け、また、一方で、社会の中で物事を民主的に決めていくにあたり自分の考えや意見を公にし、自分の考えが物事に反映されていく経験をするための方策として、学級会活動における話し合い活動の取り組みを進めていく。

さらに、安心して過ごせる教室（校内）の環境づくりとして、ユニバーサルデザインを意識した、誰に対しても優しい教室内外の掲示物の整備や、校内での約束事の見直し、また、いよいよ本格化してきた Chromebook の取り扱いについてのルールを整備したい。

なお、本校の課題の一つとして挙げられる、個別の支援が必要な生徒への対応も、待ったなしの状況であり、一刻も早い具体的対処が必須である。

以上のことから、

- 1 人間関係づくり
  - ① 特別活動（特に学級での話し合い活動）
  - ② 教育相談的アプローチ、SST、人権教育の観点より
- 2 学習規律／教室内外の環境整備
- 3 特別支援教育 個別の支援、交流学級や通級 取り出し指導
- 4 学習の具体策 Chromebook の活用や家庭学習方策

という5つのグループに分かれ、それぞれのセクションで、本校生徒の成長につながるような具体的方策を考え、実践につなげることとした。

## 2 研究の内容

テーマ	人間関係づくり		学習規律 教室内外環境整備	特別支援教育	学習の具体
主な視点	特別（学級）活動 話し合い活動	SST 教育相談的アプローチ 人権教育	教室での約束 Chromebook の運用上の約束 教室内外掲示物	取り出し指導 交流学級での学習	Chromebook の活用 自宅での学習方策
発展的視点	（Chromebook の活用）	教室以外での学習 1A教室 取り出し指導	廊下の掲示物 テストの受け方 ユニバーサルデザインの具体化	1A教室の運用 通級との連携	授業の配信 ICTを活かした授業 少人数指導

## 3 実践事例

### (1) 授業研究会～各教科領域で～

各教員がいろいろな機会をとらえて授業公開や授業研究会を実施した。

- ① 25地区進路指導・キャリア教育協議会授業研究会
- ② 埼玉県国語科地区別授業研究会  
「聞き上手になろう」というテーマで各学年の国語科で授業研究会を実施。川越市立大東西中学校小金井幸則校長、鴻巣市立赤見台中学校甘藷祐貴主幹教諭、天達新一本校校長から指導をいただいた。
- ③ 「道徳の匠」による授業研究会  
埼玉県教育委員会の事業である道徳指導における「匠の技」事業を活用して、2学年の道徳授業研究会を行った。「道徳の匠」として、埼玉県道徳教育研究会顧問吉田正氏にご指導いただいた。
- ④ 年次研修等における授業研究会
  - ア 初任者研修  
拠点校指導教員内藤隆教諭にご指導いただき、数学の授業研究会を実施。
  - イ スキルアップ研修

川越市立南古谷中学校本橋裕子教頭に指導者を依頼、家庭科の授業研究会を行うことができた。

ウ 5年次研修

エ 市教委西部教育事務所指導訪問

全教員が指導主事の指導を受けた。

## (2) 授業研究会～学校研究グループで～

### ① 人間関係づくり 特別（学級）活動 話し合い活動への取組

ア 2年学級活動「団の3年生に感謝を伝える卒業を祝う会をしよう」

いわゆる「3年生を送る会」がない寺尾中で、新型コロナウイルス感染症拡大も一段落を見せる中、体育祭の縦割り集団で集まり、1時間の「卒業を祝う会」を行うこととした。その内容やタイムテーブル、役割分担、準備分担などを話し合う学級活動を行った。

イ 1年学級活動 「みんなに感謝を伝えるお別れ会をしよう」

学級でのお別れ会を企画、内容や役割分担等を話し合う活動を行った。

### ② 人間関係づくり ソーシャルスキルトレーニング（SST）の実施

本校は今年度、25地区進路指導・キャリア教育協議会の授業研究会担当校に当たっており、SSTの取組を発表した。狭山市立御狩場小学校野村佐智夫校長、川越市立霞ヶ関北小学校大澤崇校長にご指導いただき、授業内容のみならず、特別活動に関する研修にもなった。

ア 2年 SST「電車やバスでのマナー、約束の時間に友だちが来ない！」

イ 1年 SST「あたたかい言葉がけ」

ウ 3年 SST「模擬面接～質問と受け答え～」

### ③ 特別支援教育

高階9校夏季合同研修として、「通常学級における特別に支援が必要な児童生徒の合理的配慮（支援）について」という演題で、川越市立特別支援学校肥留間智子校長を講師に迎え、全教職員で研修を行った。来年度以降の個別支援の在り方について、学ぶことができた。

## 4 研究の成果と課題

○数多くの授業研究会や研修会を通して、全教職員が教科・領域指導の工夫を意識することができ、また、多くの学びを得ることができた。

○一つ一つの授業や取組を通して、生徒は「人の話を聞き、発表する」ことや「自分の考えを説明し伝え合う活動」を中心とした言語活動に関する経験を積むことができた。

●授業の改善を通し、生徒の主体的な活動の場面の充実をさらに図り、自分の言葉で発表しまとめる力等と表現力のさらなる育成を図っていく。

●各グループから提案された内容を実行に移し、また、日々の研究を継続することで、寺尾中学校の教育活動をさらに充実したものにしていく。

## 研究主題

# 「自主的・実践的な集団活動を通して、生徒一人一人の『生きる力』の育成」

## ～積極的な話し合い活動の充実～

川越市立霞ヶ関東中学校

### 研究のポイント

- 学級会霞東スタンダードを確立する。
- 議題選定から振り返りまでの一連の流れを充実させる。
- 小中連携を図った話し合い活動を確立する。

## 1 研究の概要

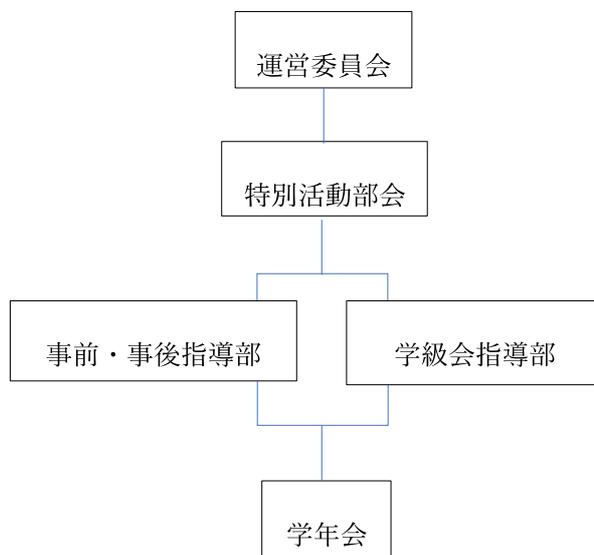
### (1) 研究のねらい

本校の生徒は、決められたことをしっかり行うことができる。一方で、自ら課題を見つけ、解決に向けて主体的に活動に取り組むことに課題がみられる。さらに令和2年度埼玉県学力・学習状況調査「規律ある態度」では、進んであいさつをすること、話を聞き発表することに関して、80%を下回る結果であった。その要因の一つとして、本校では、小学校で培ってきた話し合い活動のスキルを十分に生かせず、学級活動の話し合い活動が浸透していないことが挙げられる。学校としてこの課題に向き合い、教育活動を行っていく必要がある。

### (2) 研究主題設定理由

多様な他者と協働して課題を解決していく資質・能力は、予測困難な社会で未来を切り拓いていくために必要不可欠であり、本校の生徒に身に付けさせたいスキルの一つである。しかし、本校では、学級活動の話し合い活動が浸透しておらず、課題を見つけ、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりする指導に課題がある。教職員全体で教育手法を研究し、議題の選定から振り返りまでの一連の流れを充実させることで、生徒一人一人に自治的活動を実践する力を育成したい。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

### (1) 学級会霞東スタンダードの確立

#### ① 全校統一学級会ガイダンスの実施

パワーポイントで作成したスライドを使い、学級会はクラス等の集団をよりよくするための話し合いであることや学級会の流れ、柱立ての仕方、学級活動委員の役割等を説明した。また、全員が議題提案をする時間も設けた。

#### ② 学級会グッズ、シナリオ

学級会グッズを活用して、板書を可視化、操作化、構造化して、どの生徒にもどのような話し合いが行われているか、わかりやすくしている。シナリオを用意することで、司会者が進行しやすいようにしている。さらに、これらを全校で統一することにより、生徒会活動等に生かしていきたいと考えている。

#### ③ 学級会ノート

学級会ノートを活用し、事前に意見を用意した。担任がコメントを書き、発言を後押しできるように努めている。また、学級会ノートには話し合いの約束や意見の聞き方、言い方、みんなで決めたことを実行すること、学級会ノートの書き方等を載せており、発言を促す工夫をしている。

### (2) 議題選定から振り返りまでの一連の流れの充実

#### ① ICT 機器の活用 事前アンケート、電子黒板、振り返り

事前アンケートでは Google フォームの自動の回答集計により、学級の生徒の意見を事前に学級活動委員が把握しやすくなり、議事進行計画に役立った。学級会当日、スライドで議題・提案理由・話し合いのめあて・決まっていることを電子黒板に写すことで、黒板を話し合いだけに活用できる効果もあった。振り返りにも特活部で用意したひな形を使ったフォームを活用することで集計結果やグラフ、意見が自動で集約されるので、印刷してクラスに掲示することや前回からの伸びを視覚化することができた。

#### ② 小グループによる話し合い活動

議題を自分事に行えるよう、少人数グループで話し合い、提出した議題を学級活動委員が選定し、クラスにおろして議題の優先順位を決め、議題の決定とした。

#### ③ 活動カレンダーの活用

話し合ったことを実践していくために生徒が計画的に実践できるよう工夫を行った。実践期間が長い場合は、帰りの会などを利用し、各係の進捗状況の報告を行った。

### (3) 小中連携を図った話し合い活動の確立

#### ① 情報交換

学級会グッズ等を紹介し合い、同じ用途のグッズを使っていることを把握した。また、話し合いの中での発言の工夫(教科横断的な指導)や挙手や発言が苦手な児童生徒への手立て、教師の助言の仕方、ICT の活用場面といった互いの疑問点や実践内容を共有することができた。

#### ② 発達段階に応じた指導

それぞれの理想のゴールは「生徒たちが自ら学級会を開きクラスで話し合いたい」という形であった。9年間という大きな流れを意識し、小学校から中学校へ継承・伝達できる指導と共に学年に応じて目標を立てそれに応じた指導を行っていくことを確認し、以下のねらいにまとめた。

低学年	いろいろな役割（司会・記録）を体験できるようにする
中学年	よりよいものに意見をまとめることができるようにする
高学年	教師は見守り、児童の力で意見をまとめることができるようにする
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの機会を確保する</li> <li>・折り合いをつけた決定ができるようにする</li> <li>・課題解決の議題も選定することができるようにする</li> </ul>

### 3 実践事例

#### (1) 各学年の実践

第1学年では合唱コンクールのクラススローガンをきめる学級会を行った。三回目の学級会だったが、小学校のころの学級会の習慣がそのままに、中学校の学級会へと移行したため、霞東スタンダードの形をもとに、スムーズに進行をすることができていた。合唱コンクールの取組が初めての1年生ではスローガンを達成するための工夫のところであまり意見が出ない場面もあったが、出た意見を深め、実践計画や役割を考えることができた。

第2学年では、合唱コンクールのクラス目標を決める学級会を行った。1年生の頃から何度も学級会やってきているので、学級活動委員のスムーズな進行もあり、多くの生徒から意見が出されていた。学級会グッズを黒板に見やすく配置し、整理整頓をしながら進行に合わせて動かすこともできていた。そのため、常に見ると何を話したらよいか分かりやすい状況となっていたのが、活発な議論を生んだ一因ではないかと感じた。意見を発表する人は、賛成・反対意見に加え、しっかりと自分なりの理由まで述べていた。反対意見を述べる場合には、その代わりとなる案を付け加えたり、解決策を提案したりと、学級会を実施した回数に見合った合意形成の仕方ができるようになってきた。

第3学年は、体育祭の振り返りをいかした合唱コンクールの取組や組織についての学級会を行った。なかなか学級会を時間をかけて実施することができていない学年だったこともあり、教員も霞東スタンダードを基に型から入り、学級会をしている、自分の意見をクラスに伝えるという環境づくりから始めた。

各クラス事前に体育祭練習から本番までの良かった面、課題面、解決への工夫点を出し、集計し学級会で発表した。クラスの良かった面はクラス全体の自己肯定感にもつながるのでこれからの継続すること、また、さまざまな課題の中でクラスに必要なことを話し合い、合唱コンクールに活かすための練習方法や工夫、組織づくりや練習の取組について話し合った。

## (2) 研究授業 議題「係活動を今より活気付けよう」(2年1組)

### ① 議題選定

本学級の生徒は、明るく活発で、授業では自ら挙手・発言する生徒が多く、教え合いながら理解を深めている。また、当番活動や生徒会活動などに協力的で、温かい雰囲気にあふれている。しかし、係活動は協力的に取り組むが、当番活動としての側面が強く、豊かな生活を自分たちで築いていくことに課題が見られるため、後期係決めの際にも、当番活動と係活動の違いについて再度説明し、係活動を充実していこうと担任から学級へ話していた。

本議題は、学級活動委員がクラスの様子を振り返り、授業態度と係活動の充実を挙げ、それらの課題を学級に投げかけ、学級の生徒が係活動の活動内容に喫緊の課題があると考えたことから選定された。

### ② 本時の指導

「クラス全体でどんなことができるか」、「工夫」、「役割分担」について話し合った。全体的に賛成意見が多かったが、クイズと問題の違いについての疑問を挙げる生徒がおり、ICT機器を活用して調べ、学級としての定義づけを行うことで生徒だけで解決して決めることができた。

できるだけ助言せずに観察していたが、「役割分担」の際に、実践をイメージしきれていなかったため、一度助言した。教師の話では、疑問を解決して話し合えたこと、時間内に決められたこと、拍手がなくても温かい雰囲気でも話し合えたこと等を称賛した。

### ③ 事後の指導

話し合って決まった「係クイズ大会」を一週間後に実施した。工夫として決まったICT機器を活用し、係ごとにクイズや問題を出し合った。実践後の振り返りでは、「それぞれの係ごとにクイズを工夫して作っていたので良かったと思います。協力し合って、係の特徴を生かしたものが作れていたと思います。準備から楽しんで作れたので良かったと思います。」「クラスの全員がクイズについて考えていたり、大会中でも工夫をしたのがわかるようになっていたりしてよかったです。」等、豊かな生活を自分たちで築くことができた実感している様子だった。

## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・学級会の流れを定着させることができた。
- ・ICTや計画表等を活用する等、実践に向けた学級会スタンダードを確立した。
- ・「型」があったから賛否に加えて、理由も言えるようになった。

### (2) 課題

- ・発達段階に応じた指導の工夫
- ・心配意見や疑問等の発言を増やすための指導の工夫

次年度は発達段階に応じた目標を設定し、子供たちが多様な他者と協働して課題を解決する力を高められるよう、学級会霞東スタンダードを各学級で工夫して活用していきたい。

## 「武蔵野小学校のふるさと学習」

～ふるさと川越・武蔵野小学校への愛着・誇り・地域に貢献しようとする心を育む～

川越市立武蔵野小学校

### 研究のポイント

- ストーリー性のあるふるさと学習（1～6年のつながり）
- 社会に開かれた教育課程
  - CS（Community School）の導入を見据える。
  - GT（Guest Teacher）として地域の人材を活用する。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

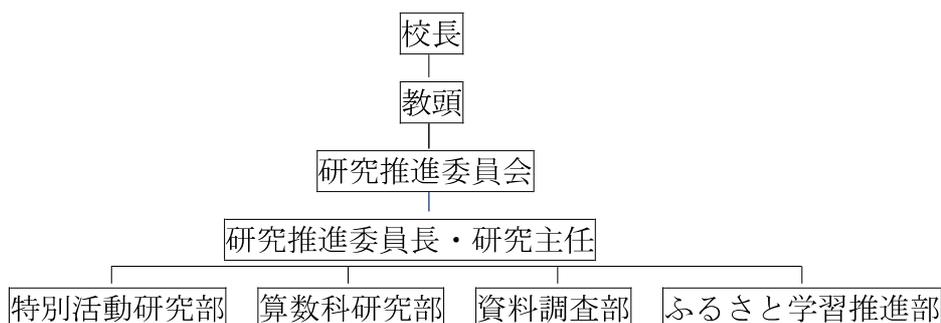
本校は、川越市の中心街からやや南に離れた住宅地の中に位置している。児童数は661名で通常学級21クラス、特別支援学級3クラスである。保護者が卒業生という家庭も多く、地域や学校への愛着は高いほうであると思う。「一人一人が安心して自分のよさを発揮できる学校」を目指し、全職員で児童のよりよい成長に向けた教育活動を行っている。

平成30年度、31年度特別活動の委嘱研究を行い、児童の自主的・自発的に取り組む力が大いに伸びた。それを土台として令和2、3、4年度と学校研究において「川越市小・中学生学力向上プラン」の趣旨を踏まえ、算数科の研究に取り組んできた。学級づくりを土台とし、算数科の研究を行うことで、「子どもたちが作り上げる授業」の具現化及び、主体的・対話的で深い学びの実現を図っている。これらの取組を礎に児童はさらに意欲的に学校生活を送っている。本年度ふるさと学習に取り組むことにより、さらに意識を地域に向け探究し地域、川越への愛着を高めたいと考えた。

#### (2) 研究主題設定理由

本校は、令和元年度開校50周年を迎え、地域の方々と共に盛大に祝い、改めて地域とともにある学校であることを感じた。また本年度、川越市においてふるさと学習の取組が重点化されたことを踏まえ、ふるさと川越への愛着や誇りを育む教育活動を意識的に推進したいと考えた。そして、学校、地域、市からさらに県や国へと愛着の心を持ち、生涯ふるさととして思いをはせることができる場所にしたいと考え、本主題を設定した。

#### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

各学年において、各教科及び総合的な学習の時間の指導計画を基に、ふるさと学習と関連する内容を精選、追加する。これを次年度の年間指導計画に明確に位置づけることで、毎年度改善していく。

各学年の学習内容（一部）

- 1年生 むさまる（主に生活科）
- 2年生 町探検（生活科）
- 3年生 武蔵野小学校（総合）
- 4年生 武蔵野の自然（総合）
- 5年生 福祉・・・街づくり（総合）
- 6年生 川越と日光のつながり（総合）
- 特支 祭りでふるさとを感じてみよう（特別活動）

むさまるとの出会い



※「むさまる」は、開校50周年記念として誕生した本校のキャラクターです。

## 3 実践事例（各学年の取組）

### (1) 1年生

ふるさとってなあに

- ・「1年生を迎える会」（学校行事）
- ・「友だちと学校探検をしよう」（生活科）
- ・「6年生の応援、むさまるとの出会い」



（学級活動他）

「1年生を迎える会」を経験することで、安心して小学校生活をスタートできた。また、武蔵野小学校の一員としての自覚が芽生えた。2年生と校内を探検し、学校にあるものやその役割について知り、様々なことに気づくことができた。バスケットボール大会に臨む6年生を応援することで他学年との関わりを増やし、上級生へのあこがれの気持ちを持つことができた。また、武蔵野小学校のキャラクター「むさまる」と触れ合うことで居心地のいい場所としての学校、その第一歩とした。

### (2) 2年生

学校から出発！  
身近な地域へ

- ・「どきどきわくわく 町探検」（生活科）

学校の周りにはどんなお店や施設があるか、事前に十分話し合うことで、まだ知らない場所がたくさんあることを知り、探検への意欲を高めた。また、目的地ごとにグループを編成し、その中での役割、質問内容などを自分たちで話し合わせた。

保護者の方の協力の下、地域を探検した。探検後は、感じたことをクラスで共有し合った後に、グループごとに絵や文章でまとめをし、発表会を行った。また、お世話になった探検先や保護者の方へのお礼の手紙を書くことで、地域への感謝の気持ちを持ち、地域を大切にすることを育むことができた。

### (3) 3年生

#### 武蔵野小学校と 私たちの川越市

- ・「武蔵野小学校を紹介しよう」（総合的な学習）
- ・「私たちの川越市」（社会科）
- ・「地域の農業の秘密を探ろう」（総合的な学習）

社会科で学習した川越農業や土地の特徴から、自分が知りたいことについてイメージマップを作成し、課題を設定した。また、地域の方の協力で3年生は毎年学校ファームにおいて大根を育てている。さらに、校内の畑でも大根とカブを育て、観察を続け、学校ファームで育った大根と比較するなどの活動も行った。地域には多くの畑がありたくさんの種類の作物が育てられていることを知り、自分の調べたことと合わせてスライドにまとめ発表し、交流することができた。

### (4) 4年生

#### 学校から出発！ 身近な地域へ

- ・「私たちむさし野の自然」（総合的な学習）
- ・「昔から受け継がれているもの」（社会科）
- ・「地域に伝わる音楽に親しもう」（音楽科）

市民の森が地域に点在し、武蔵野の自然豊かな地域であることを生かした単元である。導入では市役所の環境政策課の方からのお話を聞き、課題を設定した。また、地域の環境から文化へと学習の視点を広げた。音楽科でのお囃子の学習から川越祭りのお囃子について学習した。GTとして、元まつり会館職員さんからのお話で川越祭りについてかなり詳しい情報を得、意欲的に学習を進め地域から川越市へと学びの舞台が広がり、内容も深いものとなった。

### (5) 5年生

#### 武蔵野小学校と川 越市の自然や文化

- ・「多様化する共生社会と私たち（福祉）」（総合的な学習）
- ・「世界の中の川越（国際理解）」（総合的な学習）

福祉について社会福祉協議会の方から講話をしていただき、その後、地域の方の協力をいただいて、車いすとアイマスクの体験を行った。体験活動から、自分が調べてみたいテーマを設定し、調べ学習を行った。また、道徳や社会科の学習でも、本単元につながる内容があったのでそちらも重点として学習を進めた。また福祉の視点だけでなく、国際理解の単元でも川越の街づくりを意識させ、観光都市である川越について調べ、考えた。

まとめでは、自分が調べた内容を伝えることはもとより、未来の川越を見据え、どのような街づくりをしていったらよいか提案することができた。

## (6) 6年生

### ふるさと川越 小学校での集大成

- ・「視野を広げ、自分を見つめよう」（総合的な学習）
- ・「町の幸福論」（国語科）
- ・歴史の学習（社会科）

1学期には、世界遺産について各自が興味あるものを調べ、そこから2学期の修学旅行に向け、日光と川越の関わりについての学習を進めた。まずは地域にある山王塚古墳の見学に行った。その後、日光と川越の関わりについての講話(教務主任)、日光についての調べ学習、そして総まとめとして川越の町(仙波東照宮、本丸御殿等)の見学をした。学習のまとめとして、川越のよいところをポスターとしてまとめ、観光客や未来の川越を見据えた学習となった。

## (7) 特別支援学級

### ふるさと武蔵野小 ふるさと川越

- ・「武蔵野小学校の周りの自然と文化を知ろう」

児童の実態に合わせて地域や川越の自然などについて調べた。スライドにまとめ、発表をした。多くの児童が武蔵野小を大好きである。地域に伝わる祭りや川越祭りにも興味が広がり、特別支援学級のお祭りをしようということになり、工夫を凝らしたお神輿を作り、みんなで祭りを楽しむことができた。

## 4 研究の成果と課題

### <成果>

- ・学校、地域、川越の学習から、日光また世界遺産の学習へとさらなる学習範囲を学年に応じて広げることでストーリー性のある一連の学習の流れができた。
- ・コミュニティ・スクールの開始を見据え、地域人材のよりよい活用に着手することができた。
- ・生活科、総合的な学習だけでなく、各教科の内容も検討し、ふるさと学習の中に位置づけることで、本校独自のふるさと学習年間計画を作成することができた。
- ・学校、地域、川越へと学習を広げることで、そこにはつながりがあり、大切にすべきものだという心が育ってきた。また、学習内容や方法についても、「知る」から「提案する」へとすることで、学習に深まりが生まれ、地域に対する愛着の心情を深めることができた。

### <課題>

- ・本年度の取り組みを基にし、今後さらに教師が教材研究をし、内容を加除訂正していく必要がある。
- ・各学年の内容を確実に次の年に伝達できるよう工夫する必要がある。

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
<p>ふるさとってなあに</p> <p>学校行事「1年生を迎える会」</p> 	<p>学校から出発 身近な地域を探検</p> <p>生活「どきどき わくわく 町探検」</p> 	<p>武蔵野小学校とわたしたちの川越市</p> <p>総合「武蔵野小学校を紹介しよう」</p> 	<p>武蔵野小学校と川越市の自然</p> <p>総合「わたしたち武蔵野の自然」</p> 	<p>福祉、街づくり、自分にできることは何か</p> <p>総合「多様化する共生社会と私たち」</p> 	<p>ふるさと川越 小学校での集大成</p> <p>社会「川越の歴史」</p> 
<p>新1年生の入学を学校全体でお祝いする。「早く学校生活に慣れ、安心して過ごせる場所になりますように。」と全校児童で迎えた。</p>	<p>地域のさまざまな場所を訪問した。地域の場所や人に親しみを持ち、適切に接したり、安全に気を付けて生活したりしようとする気持ちを育成した。</p>	<p>武蔵野小学校の自然や環境などに繰り返しかかわり、身近な自然環境や社会生活と自分の生活とのかかわりについて考え、実践できるようにした。</p>	<p>「市民の森」を中心に学校周辺の自然に繰り返し関わり、身近な自然環境と自分の生活とのかかわりについて考え、日常生活に活かすことができるようになった。</p>	<p>社会福祉協議会の方のお話を聞き、「福祉とは何か」や、川越市の取組について知ること、福祉への理解を深めた。 (GT) 川越市社会福祉協議会</p>	<p>川越博物館での学習の後、仙波東照宮や本丸御殿などを、自らの足で歩き、見学した。川越の伝統・文化を体感するとともに、2学期の修学旅行と関連付けた。</p>
<p>生活「学校にいる人と仲良くなろう」</p> 	<p>生活「町探検発表会」</p> 	<p>社会科「わたしたちの川越市」</p> 	<p>総合「わたしたち武蔵野の自然」</p> 	<p>総合「多様化する共生社会と私たち」</p> 	<p>「修学旅行」日光と川越のつながり</p> 
<p>武蔵野小学校のマスコットキャラクター(むさまる)に会い、より一層武蔵野小学校に愛着を持ち、楽しく学校生活を送る児童が増えた。</p>	<p>町探検をしてみて思ったことやグループごとに探検先で質問したこと、気付いたことを絵と文で画用紙にまとめ、情報を交流し合った。</p>	<p>学校の周りや川越市の様子について観察・調査したり、地図で調べたりして、学校の周りや川越市の様子を捉え、身近な地域や自分たちの市の様子を大まかに理解した。</p>	<p>川越市役所環境政策課みどりの担当の方から話を聞き、川越市の自然環境や自然環境に対する川越市役所の活動に関しての理解を深めた。 (GT) 環境政策課 阿曾 氏</p>	<p>実際に体験することで、車いすで生活する方や視覚障害を持つ方の苦勞や不便さを実感し、そうした方々へ寄り添う気持ちを育んだ。 (GT) だるまの会、しらこぼと</p>	<p>東武ワールドスクウェアにて世界の建築文化に触れた。また、日光の歴史と文化を学び、日光と川越の歴史や文化には、深い結びつきがあることも学んだ。</p>
<p>生活「学校探検」</p> 	<p>5・6・7組「地域のお祭り・川越祭り」</p> 	<p>総合「地域の農産物のひみつをさがろう」</p> 	<p>社会「昔からうけつがれているもの」</p> 	<p>総合「街づくりの提案発表」</p> 	<p>総合「視野を広げ、自分を見つめよう」</p> 
<p>2年生にリードしてもらって学校探検を通して、学校にあるものや、その役割について考え、学校の施設の位置や働きなどに気付くことができた。</p>	<p>自分たちの暮らしているまわりの自然や文化に触れ、興味をもって調べた。子ども達は、お祭りを通して人とかかわり方を学んだ。</p>	<p>地域の野菜などの農産物や土地などを調べたり、農家の人々の生活の様子について考えたりすることを通して、身近な自然環境と自分の生活の関わりについて考え、実践しようとする気持ちが育った。 (GT) 新井氏</p>	<p>地域の人々が受け継いできた川越祭りに関係する人々の取り組みについて理解し、人々の願いについて具体的に考え、文化財や年中行事に対する誇りと愛情をもつ児童が増えた。 (GT) 大塚新田囃子連、横田氏</p>	<p>学校を離れ、自分の住んでいる街の实地踏査を行った。街の現状を考え、それらに対する第5学年なりの改善策や理想の姿を提案した。</p>	<p>世界遺産や諸外国の様子と比較しながら、「日光」と「川越」のつながりについて詳しく調べた。我が国の歴史と文化を理解するとともに、「日光」や「川越」の歴史的価値や伝統文化のよさを再認識し、ふるさとを愛する心の育成を図った。</p>

# 川越市立城南中学校 ふるさと学習 グランドデザイン

	中1	中2	中3	
<p>川越に関わるアンケート</p> <p>総合的な学習の時間</p>	<p>スローガン「地元への愛着・誇り・地域に貢献しようとする心を育む」 ～地元を知る・地元を生きる・地元に着～</p> <p>系統性を持たせる「ふるさとガイダンス」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年間を見通した「ふるさと学習」に関するガイダンス</li> <li>・小学校の既習内容も確認、把握できる事前アンケートの実施「川越の魅力や特色について知ろう」をテーマに活動開始</li> <li>・テーマに基づいた「川越めぐり」を通して、発見した魅力や特色をChromebookでまとめる探求学習と、話し合う協働学習の実施</li> </ul>	<p>「ふるさと川越新聞」と展覧会のような</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川越市立博物館の資料やワークシートを用いて、川越について学ぶ「〇〇時代の川越」「蔵造りの建物」等</li> <li>・調べ学習で「ふるさと川越新聞」を作成し、小江戸見つけ隊に応募</li> </ul>	<p>マップにはおすすめをナンバリング</p> <p>紹介文は、国際化対応の英訳付き</p> <p>川越おすすめマップの制作</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川越市内の街並み観察及び施設訪問の実施</li> <li>・「川越の魅力を発信しよう」をテーマに2年生の学習グループを継続し、学級の枠を超えた協働学習の実施（発展的で深い学びへ）</li> </ul>	
教科	<p>国語「川越かるたを活用した学習」</p> <p>社会「川越の地形から見た歴史の変遷」</p> <p>数学「川越の過去20年の人口統計から川越市の将来を考える」</p> <p>理科「地層から見るハザードマップ作成」</p> <p>英語「《過去形》を活用した川越の偉人紹介」</p> <p>道徳「道徳教材から発展させた授業展開」</p> <p>川越の《ふるさと》の歌詞をつくり、郷土への誇りを持つ</p>	<p>学校教育目標 絆をつよめ 共に高めあう 心豊かな生徒</p> <p>国語「川越の魅力を紹介しよう」</p> <p>社会「川越出身議員のマニフェスト比較及び統計調査」</p> <p>数学「全国の開花前線より川越の桜の開花日を予想する」</p> <p>理科「地域の水害ハザードマップ作成」</p> <p>英語「《受動態》を活用した建築、祭りの紹介」</p>	<p>国語「川越をテーマにした俳句づくり」</p> <p>社会「統計を整理し、議員としてマニフェストを考えよう」</p> <p>数学「『ふるさと川越アンケート』を全校生徒に実施し、標本調査を行い川越について分析する」</p> <p>理科「川越市で取り入れている科学技術と発展」</p> <p>英語「Let's write3 レポート作成」</p>	
	<p>【音楽】邦楽体験事業（1年）地域人材を活用した実技授業</p>	<p>【美術】「郷土川越を描く美術展」や「小江戸見つけ隊・川越の風景画」に応募</p> <p>【技術】キャラクター「ときも」を活かしたものづくり （プランター作製時にイラスト等を描く、栽培した作物を植えて地域に配布等）</p> <p>【家庭】川越の特産品（さつまいも等）を使用した調理実習</p>	<p>【保健体育】創作ダンス（1年）川越音頭等も取り入れた実技発表</p>	
特別活動	<p>パラリンピック種目体験（特別支援）</p> <p>PTA 合同花植え作業（委員会）</p>	<p>川越さつまいもの栽培・調理実習（特別支援）</p> <p>PTA 合同資源回収（全校）</p> <p>PTA パザー合同販売会（部活動）</p>	<p>地域清掃（全校）</p> <p>合唱コンクール・ウエスタ川越開催（全校）</p>	<p>市制100周年行事「城南中76年の歴史を学ぶ」旧校舎と授業風景（抜粋）</p> <p>リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越（部活動）</p> <p>新宿町ふれあいまつり参加（部活動等）</p>



## 研究主題

「自分の思いや考えをもち、進んで表現し、互いに考えを深めていくことができる児童の育成」  
～ICT 機器を効果的に活用した学びを通して～

川越市立大東西小学校

### 研究のポイント

- ① 川越授業スタンダードの充実
- ② 情報モラル教育の推進
- ③ 年間指導計画の見直し
- ④ 情報活用能力の育成

## 1 研究の概要

### (1) 研究の主題設定の理由

川越市が目指す「授業スタンダード」に基づき、本校では、ICT 機器を活用した授業改善を図っている。特に昨年度は GIGA スクール構想に伴い導入された ICT 機器を日々の授業や学校行事でいかに活用できるかを学校研究として取り組んだ。また、一人一回 ICT 機器を活用した公開授業も実施した。

そこで見えてきた課題をさらに検証していくために、昨年の研究を引き継ぎながら本研究主題を設定した。

### (2) 研究の仮説と手立て

仮説① 川越授業スタンダードを充実させていけば、自ら課題を見つけて、互いに考えを深めていくことができるだろう。

手立て① 川越授業スタンダードの充実

仮説② 児童の発達段階に応じた ICT の効果的な活用を図れば、主体的に学習に取り組むことができるだろう。

手立て② ICT 機器を活用した授業改善

### (3) 昨年度の課題

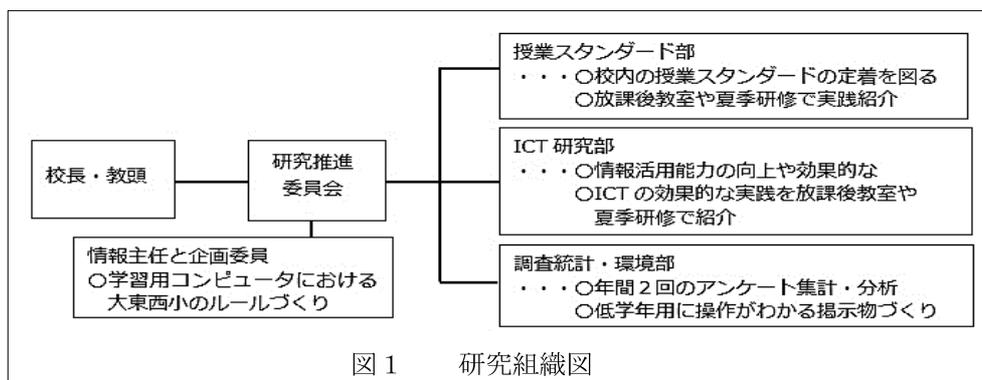
- ①授業スタンダードの定着率の向上
- ②ICT 機器に関わる情報モラルや情報セキュリティの指導
- ③ICT 機器を効果的に活用した授業の共有
- ④情報活用能力の育成

昨年度は導入された ICT 機器の有効的な活用を職員で模索しながら進めていたため、情報モラルをはじめ、できていなかったことを整理し実施することが急務であった。そこで今年度は、組織体制を構築することや年間を見据えた計画を立てて取り組んだ。

## 2 研究の内容

昨年度の課題に対して、以下のように取り組んだ。

### ①研究組織の設置（授業スタンダード部）



令和4年度は、「川越授業スタンダード」も『定着』から『深化』の年にステップアップすることや本研究の仮説の手立てでもあることから、図1のように研究組織のひとつに『授業スタンダード部』を設置した。夏季研修では、算数の授業を中心に、どのように見通しをもたせるか、どのように対話・協働（学び合い）をするかなど、それぞれの学習過程の場面について話し合い、よりよい授業スタンダードを考える機会を設け、2学期からの実践につなげた。



### ②情報モラル教育の推進

川越市教育委員会の学校指定研究を受け、情報モラル教育を実施した。“子どもがICTを使う”ことを前提とした教育活動の中で、安心してICTを活用することができるよう、子どもたちが自分たちの意思で自律的にデジタル社会と関わっていくための資質・能力（情報モラル・セキュリティ教育→デジタル・シティズンシップ）を育成するための指導カリキュラムのモデルプランを実践・検証した。具体的には、内容により教科・総合・道徳・学活などの時間で、発達段階に応じた指導内容を検討し、各学期に1回実施した。

実践報告の一部（実施学年と本時のねらい）

- ・ 1年生：「ID」や「パスワード」の意味や役割を知り、正しく安全に運用しようとする。
- ・ 3年生：発信者の情報があるかに注目して、テーマを調べるために信頼できるWebサイトを選ぶことができる。
- ・ 4年生：オンラインのやりとりで、なぜトラブルが起きるのかについて考え、その対策を練ることを通して、自分の役割を自覚し、責任をもって発信をする大切さを学び、よりよいオンラインの関係を築くことができるようにする。
- ・ 6年生：グループ内でそれぞれが違った相手に向けて同じテーマのスライドを作成することを通して、説明する相手によって、表現方法が変わることに気付き、テーマについてまとめることができる。

### ③年間指導計画の見直し

各学年で ICT 機器を効果的に活用した授業を全体で共有することにした。そのために、教師がよく目にする年間指導計画一覧表に実践事例を追記することにした。具体的には、図2のように、年間計画一覧表の下に新たな枠を作成して、「何月のどの教科でどのように活用したのか」を各学期の終わりに学年で話し合ってから入力することにした。

さらに、本校の共有ドライブを作成し、有効的に活用できた作成物（スライドやフォーム等）を学年のフォルダに入れることにした。

※年間指導計画にその作成物を追記した際に、学年フォルダ内の何と何がリンクしているのかが分かりやすいように表記し保存している。（図3参照）

図2 年間計画一覧表（6年生）の一部抜粋

例  
『国語(8)  
(9)』と記載し、年間計画一覧表とリンクさせる。

図3 共有ドライブ内に残した効果的な取組や作成物

このように ICT 機器の効果的な活用を個人の実践で蓄積するのではなく、校内で共有することにした。また、記録に残すことで、次年度、どの学年の担任になっても一から作成するのではなく、効果的だった取組をすぐに活用できるという環境ができた。

#### ④情報活用能力の育成

日々の授業で ICT 機器を有効的に活用するためには、教師だけでなく、児童の情報活用能力の育成が大事になっていく。そのために、研究組織の「ICT 研究部」が中心となり、児童の情報活用能力の育成に向けた校内研修会を実施した。

ICT 研究部が紹介した実践

- ・操作入力について（手書き入力・音声入力の設定方法）
- ・キーボード操作の練習（キーボード島アドベンチャーの紹介）
- ・描画キャンパスの使い方、カメラを使った図工学習の紹介
- ・Google フォームを活用した国語の立場分け・文章化、アンケートでの傾向の把握について

### 3 授業実践

本年度はブロック研究授業（4回）と全体研究授業（4回）を行い、目指す児童像に向けて、手立てが有効であったかを検証した。

#### 【全体授業研究会】

- ①中学年 4年1組 小澤 耕太 教諭 理科「電気のはたらき」
- ②教務部 3年2組 城戸 翼 教諭 音楽「ちいきにつたわる音楽でつながろう」
- ③高学年 6年4組 小川真里奈 教諭 国語「世界に目を向けて意見文を書こう」
- ④低学年 2年2組 村山 宙 教諭 算数「図をつかって考えよう」

※全体授業研究会に関しては、どの授業においても指導主事からご指導をいただいた。



### 4 研究の成果と課題

#### (1) 成果

- アンケートの調査結果より、ICT 機器を使わないときに比べて、使った方が①自分の考えや意見を進んで表現できる児童が多いこと、②友達のことを知り、自分の考えと比べて交流しやすくなったと思う児童が多いことが分かった。この結果から、目指す児童像（⑦自分の思いをもち進んで表現できる児童⑧友達と考えを共有し、比べ合い、よさを認めることができる児童）の育成に大きく迫ることができた。
- まとめとめあてが正対しているかや、本時の振り返りが次時の学習につながるかなど、授業スタンダードの視点をもとに授業づくりをすることができるようになった。

#### (2) 課題

- ▲ICT 機器を活用することが目的とならないように、引き続き、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、川越市授業スタンダードの充実を継続していく。

## 研究主題

# 「ICT を正しく主体的に使いこなす生徒の育成」

川越市立大東西中学校

## 1 研究の概要

### (1) 研究の主題設定の理由

子どもたちを取り巻く社会のデジタル化が急速に進み、ICT が身の回りであることが日常となった。また、GIGA スクール構想により、家庭だけでなく、学校でも子どもたちの ICT 活用が進み、デジタル化のメリットを生かした新しい学びの形が進んでいる。

一方で GIGA スクール構想の急速な進展により、デジタル化の負の側面からの影響もみられるようになってきた。ICT 活用の推進を図るには、子どもたちが ICT を安全に利用するための指導法や環境の醸成が必要であると考え、本研究主題を設定した。

### (2) 研究の仮説と手立て

仮説：小学校からの 9 ケ年を通して、発達段階に合わせた情報モラル教育を実施することで、ICT を正しく主体的に使いこなせるようになり、「いつでも、どこでも、自由に」端末を活用することができるようになるのではないかと。

手立て：小学校と連携し、小学校 6 ケ年の学びを基にした情報モラル教育を、総合的な学習の時間、道徳、各教科で行う。

## 2 研究の内容

教育委員会から提供されたモデル授業プランをもとに、以下のように取り組んだ。

### ●総合的な学習の時間での、発達段階に合わせた情報モラル教育

川越市教育委員会の学校指定研究を受け、総合的な学習の時間に、情報モラル教育を実施した。GIGA スクール構想により、1 人 1 台端末が実現した今だからこそ求められる、「デジタル機器やインターネットを活用して、自身の力で課題解決できるスキル（デジタル・シティズンシップ）」を育成するためのモデル授業プランを、各学年の実態に合わせて実施した。

### ●道徳の時間での情報モラル教育

道徳の教材を活用して、情報モラル教育を実施した。

1 学年「短文投稿サイトに友達の悪口を書くと」（東京書籍「改訂 新しい道徳 1」）

2 学年「ゴール」（東京書籍「改訂 新しい道徳 2」）

3 学年「合格通知」（東京書籍「改訂新しい道徳 3」）

### ●技術家庭科（技術分野）での情報リテラシー、情報モラル教育

3 学年技術家庭科（技術分野）において、情報通信ネットワークの科学的な知識や、インターネットの特徴、著作権などを学んだ。

### ●授業後の振り返り、フィードバック、情報共有

各学年での授業後に、授業担当者が授業を振り返り、フィードバックを行った。また、その内容や指導案を全教員で情報共有した。

### 3 授業実践

ここでは総合的な学習の時間に行った情報モラル教育について報告する。

#### 1 学年「オンラインでの発信が未来や社会に与える影響とは？」

目標：10月ソーシャルメディアとSNSを定義し、その価値と欠点を明らかにする。

デジタル足跡を定義し、ソーシャルメディアを利用する際の自分や他者のデジタル足跡の影響について考える。

自分と他者のデジタルに残る足跡を意識しながら、ソーシャルメディアの良さを活かし、社会への責任を考えた使い方を検討する。

身近なSNSの話題を取り上げ授業を行ったことで、自分事として考えることができていた。今まで、被害者になるイメージはあったようだが、授業を受けて、自分が加害者になってしまう可能性も大いにあることを確認できた。それぞれの事例を班ごとで話し合うことで考えを深めていた。気軽に投稿したことも、場合によっては大きな問題になったり、損失を受ける人が存在したりするという事実を知り、責任を持った情報発信についても認識を改めることができた。

#### 2 学年「情報を編集・発信するときの責任ってなんだろう？」

目標：偽情報（フェイク）を定義し、オンラインで偽情報（フェイク）を広めることの影響を検討する。

ネット上の情報の真偽を確認する方法を確かめる。

周りに溢れる情報と向き合うとき、行動する際の3つのステップを学ぶ。

いくつかの事例を提示し、どう思うかをグループで話し合いを行った。安易に情報を信じて拡散することや、面白半分で、適当な情報を広めることがよくないことであるということについて、理解をしている生徒がほとんどであった。しかし、実際の場合で考えると、判断に迷う場面や誤った行動をとってしまう可能性があることを確認することができた。

また、身近な問題であるためか、生徒は積極的に話し合い、様々な可能性について考えることができた。今回学んだことを、今後の生活に生かしていきたいという振り返りが多く見られた。

#### 3 学年「みんなが納得する社会課題解決って？」

目標：シビックテックを定義し、地域社会に影響を与える要因について考える。

ダイバーシティ&インクルージョン(多様性と包摂)について考える。

社会の多様性に配慮したテクノロジー活用の工夫について考える。

地域社会の役に立つアプリ開発を通して、多様な人々が参加し、合意形成しながら社会を作っていくためにはどうしたらよいかを考える内容で、動画の視

聴、ワークシートの記入、班ごとの話し合い活動を行った。多くの生徒が話し合い活動に積極的に参加していた。今後の社会課題解決に、情報技術を利用するメリット、またそれによる情報格差などのデメリットにも目を向けた振り返りをする生徒も多くみられた。

【授業の様子（1年生）】



【使用したオリジナルのワークシート（2年生）】

情報モラルについて考えよう  
～情報を編集・発信するときの責任って？～

Q1 動画を写してどう思いますか？

Q2 なぜ、偽情報やフェイクが作られる？

Q3 偽情報（フェイク）が広がることでどんな影響がある？

Q4 ①なぜ広がる？ ②真偽を確かめる方法は？

①

②

★大切なことは何だろうか？★

～振り返り～

【ワークシートの記述（3年生）】

アプリ利用者が直面した問題の原因と解決策

他のお客さんに迷惑がられたベビーカーを押した女性	他のお客さんに迷惑がられたベビーカーを押した女性
店としては入店OKだったけど、実際に利用客はいいと思えていなかった。→事実としての情報だけを見て、実態を把握していなかった。	実際の利用客にも聞き、その上で大丈夫かどうかなのである。ベビーカー置き場をつくる。お母さんモ、とよく見る

なぜ・どのような場面で私たちは、ダイバーシティ&インクルージョンを進めるべきなのでしょう。それによってどのような効果をもたらされるのでしょうか。

インクルーシブな社会はいいけど、便利が時代だから、自分も便利にしたい。でも、みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。でも、みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。

技術が進んでいく中で、それを上手に利用できるようにするには、使い方がいろいろある。それをみんなが使えるようにしていく必要がある。

多様な人々が参加し、合意形成しながら社会をつくっていくためにはどうしたらいいのでしょうか。また、自分はどのように行動したいと思いますか。

みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。でも、みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。でも、みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。

みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。でも、みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。でも、みんなが便利にしたいから、みんなが便利にしたい。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

どの学年も多くの生徒が興味関心をもって授業に取り組んでいた。また話合い活動なども主体的に取り組み、自分事としてとらえられた生徒が多かった。GIGA スクール構想では「いつでも、どこでも、自由に」端末を使うことが重要になる。また、端末を持ち帰って授業外で活用する際には子どもたちに使い方がゆだねられる。従来の情報モラル教育では「制限することで安全を確保」するなど、他律的な指導であったが、今回の授業を通して、生徒が興味関心を持ち、自分事として課題解決に取り組めたことは大きな成果であったと考える。

また、学習指導要領が目指す「これからの社会が、どんなに変化して予測困難になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現する」ためにも、今回の取組み大きな意義があったと考える。

(2) 課題

今回行った授業の中には、生徒が初めて聞く用語など、知識として少し難しい点があった。生徒がどこまで理解しているかを把握し、丁寧な指導を心掛ける必要があると感じた。また、デジタル化を取り巻く環境は日々変化していくと予想されるため、授業内容や教材を、その時の状況や生徒に合わせて、作っていく必要があると感じた。

研究主題

## 「地元への愛着・誇り・地域に貢献しようとする心を育む」

～地元を知る・地元で生きる・地元で密着～

### 研究のポイント

川越市立城南中学校

- 地元を知る
  - ・ 川越の歴史、文化を中学生の視点で学ぶ。(愛着)
- 地元で生きる
  - ・ 川越の魅力を発信する。(誇り)
- 地元で密着
  - ・ 地域の行事に参加する。(貢献)

## 1 研究の概要

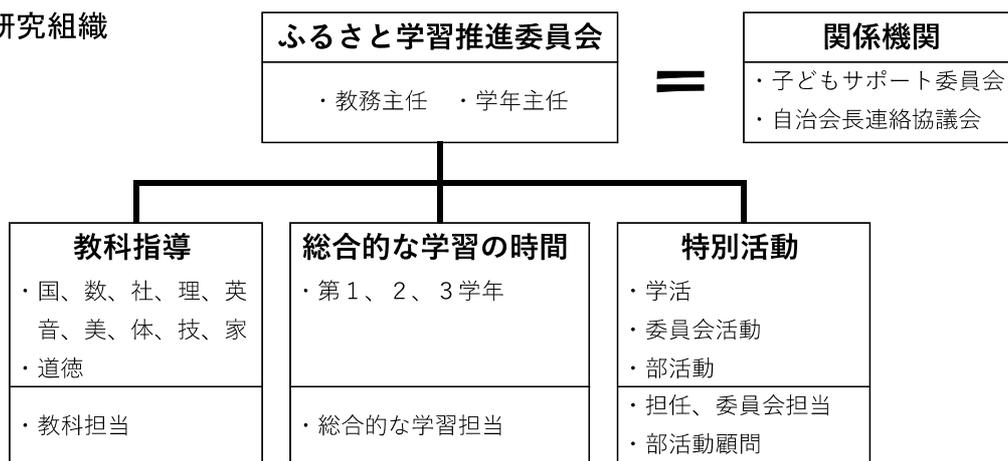
### (1) 研究のねらい

川越市ふるさと学習では「ふるさと川越への愛着・誇り・地域に貢献しようとする心を育む」をテーマに、ふるさと川越を学びのフィールドとして、9年間の連続性をもって探求的に学ぶことを通し、ふるさとへの愛着と誇りをもち、地域社会はもとより、国内・世界で自らの未来を切り拓く真の人間力を育成することを目標に掲げている。この9年間を通した学びには、身近な地域から始め、川越の魅力について知り、考え、探求することを通して、自分たちの住むふるさと川越への「愛着」「誇り」を育み、将来、地域に貢献しようとする心の土台を築く小学校6年間。興味や関心のある分野を主体的に探究することを通して、ふるさと川越への愛着・誇りを高め、川越の魅力を継承し、地域に「貢献」しようとする心を育てる中学校3年間の連続性がある。

### (2) 研究主題設定理由

本校では、「地域(地元)について知り、地域の取組に参加して、共に生きること。」をスローガンに研究を進めることで、生徒がこれまで生活してきた約12年～15年を基盤とした地域との関係性を深めることを目標にしている。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

「ふるさと学習の推進に関する研究」

ふるさと学習推進委員会を中心として、「ふるさと学習」の視点から、「教科指導」、「総合的な学習の時間」、「特別活動」において全体計画や年間指導計画を見直し、実践を行った。また、子どもサポート委員会や自治会長連絡協議会など地域の関係機関との連携にも努めて研究を推進した。

## 3 実践事例

### (1) 校内研修（教科部会）

- ① 校内研修の一環で、ふるさと学習推進について職員で趣旨を共有した。以降、教科部会を適宜実施する中で、次年度の全体計画及び年間指導計画作成に向けて「人権」「主権者」「消費者」「防災・安全」と同様に、「ふるさと」に関連する指導内容を精査し、明記した。
- ② 今年度の指導計画に沿った内容については、事前準備をして実施した。また、その振り返りを次年度に活かせるように教科部会を行った。

### (2) 総合的な学習の時間

- ① 各学年の総合的な学習の時間において、「ふるさと学習」に関連する項目を取り入れた。
  - ・1学年では、中学3年間を見通した（系統性を意識した）ふるさと学習に関するガイダンスから始まり、「川越の魅力や特色について知ろう」をテーマとした活動を行った。事前アンケートを実施することで、小学校までの既習事項を確認し、テ

ーマに基づいた「川越めぐり」に向けて主体的に川越の魅力や特色に触れ、思考する時間を設定した。



<アンケート>

<ガイダンスの様子>

- ・2学年では、市立博物館の資料を参考に学習を進め、歴史や文化、蔵造りの建造物等に注目した探求学習を行った。また、夏休みには学年全体で「小江戸見つけ隊」に応募し、自分たちで学習した内容についてアウトプットする活動をした。



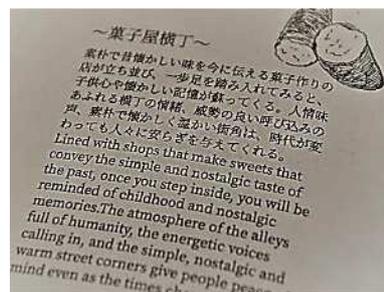
<ふるさと川越新聞を小江戸見つけ隊に応募>

- ・3学年では、2年次で行った「中学生視点の川越散策」を発展させた学習を実施した。現地の状況や施設について紹介できるよう情報収集を行い、それらを基に川越駅周辺で配布できる観光用パンフレットを作成した。自ら考えた紹介文は、英訳するなど外国人観光客を視野に入れた「地元を生きる」をテーマとした活動となった。



<川越おすすめマップ>

※国際化対応の英訳付き



### (3) 教科

- ① 全教科（国・数・社・理・英・音・美・体・技・家）で、「川越市」や「地域」をテーマとした指導内容を計画し、系統性や教科横断的な学習となるよう第1学年から第3学年に向けて発展した学習指導ができるよう工夫した。
- ② 特別の教科「道徳」においても、第1学年の教材「ふるさと」に因んだ発展学習として、「川越」をテーマにした歌詞を作成し、発表した。



### (4) 特別活動

- ① 全校生徒が関係する地域清掃や PTA 合同の資源回収、委員会を中心とした PTA 合同の花植え作業、部活動を主とした販売会や地域ふれあいまつりへ参加した。また、子どもサポート事業より地域人材を生かした特別支援学級対象のパラリンピック種目ボッチャの体験や、学校農園での特産品栽培及び調理実習を行った。

## 4 研究の成果と課題

- ・今年度の実施内容を基に、来年度以降の「ふるさと学習ランドデザイン」を作成することができた。
- ・「地元を知る」について、各学年の総合的な学習の取組において校外学習や ICT を活用した探求学習によって主体的に活動する様子がみられた。また、その発展学習として行われた観光用パンフレット作成は、「地元で生きる」（共生）と言える活動となった。
- ・「地元で密着」では、生徒会や部活動など様々な活動で地域の活動に参加したり、地域人材の活用が展開されたり、主題設定理由である“地域との関係性を深める”について、進展があった。また社会体験事業等の行事が再開できれば、地域との関係性はより深まると考えられるため、今後の学校行事の精選や、生徒と職員間、地域の求める「共生」について話し合う時間を設定していきたい。

# 川越市立教育センター

令和5年3月発行

〒350-0001

埼玉県川越市大字古谷上6083-10

TEL (049) 235-7591

FAX (049) 230-1023



川越市マスコットキャラクター  
ときも